

箱崎 35

—箱崎遺跡第 57 次調査報告—

2008

福岡市教育委員会

HAKO ZAKI
箱 崎 35

—箱崎遺跡第57次調査報告—



遺跡名号 調査番号
HKZ-57 0671

2008

福岡市教育委員会

序

九州の北部、玄界灘に面して広がる福岡市には、豊かな自然とともに、先人によってはぐくまれてきた長い歴史的遺産が残されています。地理的関係から、大陸との文化・交易などの交流を示す遺跡、文物も市内に多くみられます。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現代に生きる私たちの重要な務めです。しかし近年の著しい都市化に伴い、それが次第に失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、都市開発等によりやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存を行うとともに、出土遺物等の活用に努めています。

本書は、共同住宅の建築に伴い平成19年3月から4月にかけて発掘調査を実施した、東区箱崎遺跡第57次調査の成果を報告するものです。調査では中世の集落を検出し、輸入陶磁器をはじめとした多くの遺物が出土しました。これは箱崎地区の歴史を解明する上で貴重な礎になるものと考えられます。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また歴史研究の資料として活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、株式会社リライエステートをはじめとする関係者の方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心からの謝意を表します。

平成20年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 山田裕嗣

例　　言

- 1 本書は福岡市教育委員会が民間共同住宅の建築に伴い、福岡市東区箱崎一丁目2493番地外で発掘調査を実施した箱崎遺跡第57次調査の報告である。
- 1 箱崎遺跡では平成18年度末までに57次にわたる発掘調査が行なわれ、『福岡市埋蔵文化財年報』での報告も含め32冊の報告書が刊行されている。その報告書一覧については44頁にまとめた。
- 1 本書で報告する調査の細目は下表のとおりである。

| 調査番号 | 遺跡略号 | 調査面積 | 調査期間 |
|------|---------|-------------------|------------------|
| 0671 | HK Z-57 | 245m ² | 2007年3月12日～4月27日 |

- 1 本書に掲載した遺構実測図および遺構等の写真撮影は文化財部埋蔵文化財第1課主任文化財主事荒牧宏行（現福岡市埋蔵文化財センター）、同池崎謙二、同濱石哲也、埋蔵文化財第2課主任文化財主事田中寿夫が行い、他に実測で森本幹彦（埋蔵文化財第2課）、藤野雅基、中村理の協力を得た。
- 1 遺物の実測・製図は濱石が主にあたり、実測の一部については池崎、中村が行った。
- 1 遺物の写真撮影は田中による。
- 1 遺物の整理には太田次子、石谷香代子があたり、他に樋口久子の協力を得た。
- 1 本書に用いた方位は磁北である。
- 1 遺構は3桁の通し番号を用い、遺構の種類に応じて SE（井戸）、SK（土坑）、SX（焼土面等）、SP（柱穴、ピット）の略号を番号の前につけた。
- 1 本書に掲載した出土遺物は1～284までの通し番号とし、55・56図の遺物写真番号もこれと一致する。
- 1 本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。
- 1 本書の執筆、編集は荒牧、池崎、田中の協力のもと濱石が行った。

本文目次

| | 本文頁 |
|---------------|-----|
| Iはじめ | 5 |
| II遺跡の立地と環境 | 5 |
| III調査の記録 | 11 |
| 1 調査の概要 | 11 |
| 2 遺構と遺物 | 12 |
| (1) 井戸 | 15 |
| (2) 土坑 | 22 |
| (3) 谷 | 35 |
| (4) その他の遺構と遺物 | 37 |
| IV小結 | 43 |

図目次

| | 本文頁 |
|------------------------------|-----|
| 1図 箱崎遺跡の位置図 (縮尺 1/50000) | 6 |
| 2図 箱崎遺跡北側調査地点位置図 (縮尺 1/5000) | 7 |
| 3図 箱崎遺跡第57次調査区位置図 (縮尺 1/500) | 8 |
| 4図 西側調査区全景 (南東から) | 9 |
| 5図 東側調査区全景 (南から) | 9 |
| 6図 遺構配置全体図 (縮尺 1/100) | 10 |
| 7図 B-1区東壁土層図 (縮尺 1/60) | 11 |
| 8図 A-1区 (東から) | 12 |
| 9図 A-2区 (東から) | 12 |
| 10図 A-3区上面 (東から) | 12 |
| 11図 A-3区完掘後 (東から) | 12 |
| 12図 B-1・2区 (南から) | 12 |
| 13図 B-2・3区 (南から) | 12 |
| 14図 SE075 (東から) | 13 |
| 15図 SE075井戸側 (北から) | 13 |
| 16図 B-2区井戸群 (西から) | 13 |
| 17図 B-2区井戸群 (北東から) | 13 |
| 18図 SE146・257 (南西から) | 13 |
| 19図 SE146井戸側 (北から) | 13 |
| 20図 SE306 (東から) | 13 |
| 21図 SE354 (東から) | 13 |

| | | |
|-----|---|----|
| 22図 | SE075・146・257・306実測図（縮尺 1/60） | 14 |
| 23図 | SE075出土遺物実測図（縮尺 1/3） | 15 |
| 24図 | SE146・257・306出土遺物実測図（縮尺 1/3） | 16 |
| 25図 | SE354・356実測図（縮尺 1/60） | 18 |
| 26図 | SE354出土遺物実測図1（縮尺 1/3） | 19 |
| 27図 | SE354出土遺物実測図2（縮尺 1/3） | 20 |
| 28図 | SE356・361出土遺物実測図（縮尺 1/3） | 21 |
| 29図 | SK027（北から） | 23 |
| 30図 | SK035（北から） | 23 |
| 31図 | SK076（南から） | 23 |
| 32図 | SK141（東から） | 23 |
| 33図 | SK201（西から） | 23 |
| 34図 | SK365・366（南から） | 23 |
| 35図 | SK366（西から） | 23 |
| 36図 | SK401（北から） | 23 |
| 37図 | SK004・027・035・037・039・076・115・141実測図（縮尺 1/40） | 24 |
| 38図 | SK004・027出土遺物実測図（縮尺 1/3） | 25 |
| 39図 | SK035・037出土遺物実測図（縮尺 1/3） | 26 |
| 40図 | SK039・076・115・141出土遺物実測図（縮尺 1/3） | 28 |
| 41図 | SK185・201・281・282・312・364実測図（縮尺 1/40） | 30 |
| 42図 | SK145・185・201・282出土遺物実測図（縮尺 1/3） | 31 |
| 43図 | SK308・312出土遺物実測図（縮尺 1/3） | 32 |
| 44図 | SK365・366・401実測図（縮尺 1/40） | 33 |
| 45図 | SK366・401出土遺物実測図（縮尺 1/3） | 34 |
| 46図 | A-1区溝（東から） | 36 |
| 47図 | B-1区溝（東から） | 36 |
| 48図 | A・B-1区溝位置略図および土層実測図（縮尺 1/100、1/60） | 36 |
| 49図 | SX120（東から） | 37 |
| 50図 | SX120（南から） | 37 |
| 51図 | SX120実測図（縮尺 1/40） | 37 |
| 52図 | SX078・120出土遺物実測図（縮尺 1/3） | 38 |
| 53図 | SP099・271遺物出土状況実測図（縮尺 1/20） | 39 |
| 54図 | ピットおよびその他の出土遺物（縮尺 1/3） | 40 |
| 55図 | 出土遺物写真1 | 41 |
| 56図 | 出土遺物写真2 | 42 |

I はじめに

福岡市の中心博多・天神の北東にある箱崎は、平安時代に創建された箱崎宮を中心に、箱崎千軒とよばれ对外貿易の拠点としてさかえたといわれる。江戸時代には青柳宿から博多に至る街道の宿場町でもあり、また明治にはいると現在のJR鹿児島本線が敷設されるとともに九州大学が開設され、大学町としても発展してきた。昭和15年福岡市に編入された後も近年まで東区の中心地域にもかかわらず、箱崎宮の門前町、かつての宿場町として古い家並みをとどめていた。平成4年、良好な市街地の形成と都市機能の向上を図るために箱崎土地区画整理事業計画が決定され、道路の整備、鉄道の高架化などをはじめとした土地区画整理による新たな街づくりが開始された。これに伴い、事業地内はもちろんのことそれ以外の地区でも再開発が進み、箱崎遺跡として登録されているこの地域一帯での埋蔵文化財についての黙会、届出、さらには発掘調査が増加してきた。

平成18年10月20日、株式会社リライエステートから福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課に、東区箱崎一丁目2493番地外に共同住宅を建築するにあたり埋蔵文化財の有無についての黙会がなされた（受付番号18-2-657）。建築予定地は箱崎遺跡の中央や西北部にあたり、周辺ではすでに発掘調査が行われるなど、遺跡の存在が濃厚であった。12月12日に確認調査を実施し、現地表下1m前後で遺構、遺物を確認した。事業計画からみて建築に先立つ発掘調査は避けようもなく、協議の結果、平成19年3月5日に委託契約の締結となった（委託者：株式会社リライエステート代表取締役高島照彦、受託者：福岡市）。事業面積518.62m²のうち建築により埋蔵文化財に影響がある242.20m²を対象として3月12日～4月27日に本調査を行い、また整理報告は平成19年度中に実施するという内容であった。

これを受け、埋蔵文化財第1課（課長 山口謙治）が3月12日から本調査を開始し、当初主任文化財主事荒牧宏行が担当、4月の人事異動に伴い同課主任文化財主事演石哲也・池崎謙二および埋蔵文化財第2課主任文化財主事田中寿夫が交替し、4月27日に調査を完了した。調査終了後、整理作業を進め、この報告に至った。

調査にあたっては株式会社リライエステートをはじめ事業関係者各位、また近隣住民各位のご協力を得た。厚く御礼申し上げます。

II 遺跡の位置と環境

福岡市は北の博多湾を抱くように東から西へ香椎、箱崎、博多、西新、姪浜、今宿などの地域が河川または山塊を挟んでその市街地を形成している。そのほとんどが古砂丘上に立地しており、弥生時代からの人々の苦しがこれまでの発掘調査で確認されている。これらの地域は古くから海を通した交易の拠点となり、また中世には元の侵攻に対する防衛線としてこれらの地域をむすんだ石築地（元寇防壁）が設けられた。

箱崎は博多湾頭からみれば東南方向に、また福岡市の玄関口の一つであるJR博多駅からは北約2.5kmに位置する。香椎とは多々良川で隔てられているが、現在博多との間に流れる御笠川は戦国時代に付け替えられたといわれ、もともとは博多とは砂丘でむすばれていた。箱崎と博多との間には吉塚本町、吉塚祝町、堅粕、吉塚の遺跡が連なることが確認されている（1図）。箱崎の東側は多々良川の支流である須恵川、宇美川が流れる。かつてここは博多湾に続く入り江があり、「箱崎津」と呼ばれた港として機能していたという。この箱崎は、延長元年（923年）、穗波郡大分宮をこの地に遷座して創建



1図 箱崎遺跡の位置図（縮尺 1/50000）

したとされる筥崎宮を中心に歴史的環境が形成されてきた。

箱崎遺跡はこの地の箱崎1丁目、馬出5丁目を中心に南北約1000m、東西約500mの範囲に広がる。遺跡は箱崎から良良区百道に至る博多湾沿岸に形成された箱崎砂層と呼ばれる古砂丘上に立地する。遺跡の西側には元寇防壁の推定ラインが多々良川から博多まで続く。現在の地形は、遺跡のほぼ中央にあたる筥崎宮の標高が4m前後、そこからほぼ南北方向に尾根ができ、その東西側はゆるやかに傾斜している。これまでの発掘調査に基づく旧地形の復元では、筥崎宮を中心北側では通称大学通り（主要地方道福岡直方線）の西側に、また南側では鞍部を挟んで吉塚駅方向に3~3.5mの砂丘尾根があつたことが想定されている。

この箱崎遺跡は福岡市教育委員会が昭和56（1981）年刊行した『福岡市埋蔵文化財分布地図（東部1）』では元寇防壁推定線がのみが記載されているだけで、遺跡としての登録はなされていなかった。しかし、筥崎宮の歴史、その境内から出土したという白磁、また古砂丘という立地などからみて遺跡の存在は十分に予測されていた。昭和57年から福岡市営地下鉄2号線の工事に際して立会調査を行い、

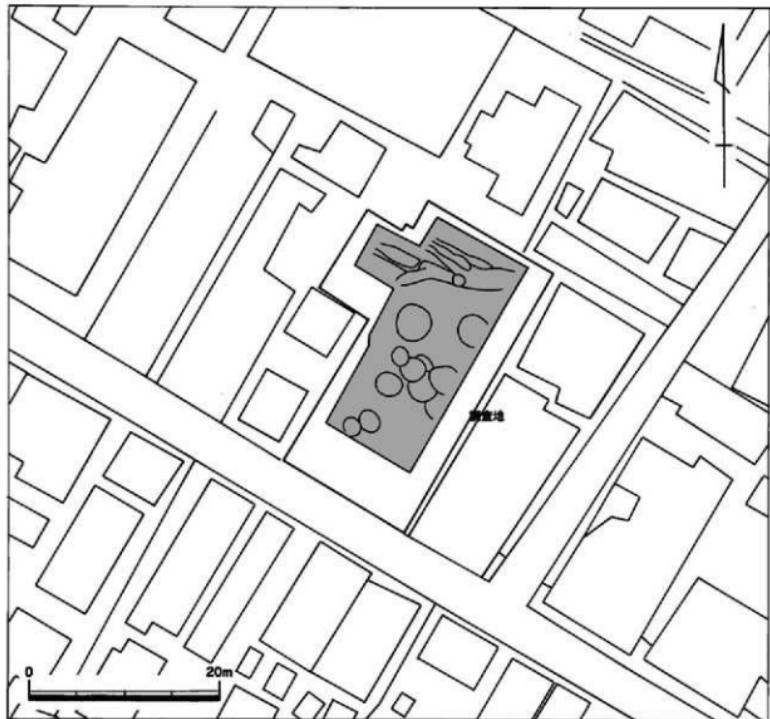


2図 箱崎遺跡北側調査地点位置図(縮尺 1/5000)

馬出2・5丁目で包含層を確認し、当初箱崎・馬出遺跡群として昭和58年7月～12月にかけて発掘調査を実施した。中世の構造や遺物が出土し、菅崎宮の対外交渉の拠点として一端が明らかにされた（第1次調査）。また昭和61（1986）年には箱崎1丁目の福岡県柏屋総合庁舎の建設に伴い福岡県教育委員会が発掘調査を行い、建物地盤や溝、井戸などの遺構とともに多くの輸入陶磁器類の出土をみた（第2次調査）。これにより菅崎宮を中心とした地区に遺跡が広がるのは確実となり、その後の調査も加味して平成8（1996）年刊行した『福岡市埋蔵文化財分布地図（東部Ⅰ）』（改訂版）では箱崎遺跡としてその範囲が地図上に示されるようになった。

平成19（2007）年12月現在、箱崎遺跡では59次にわたる発掘調査が実施されている。その多くが菅崎地区画整理事業計画が決定され、新たな街づくりが開始された平成6年度以降にかかり、とくに21世紀に入っての調査は35件と著しい。箱崎地区の町並みが急激に変化している状況を示している。

これらの調査の結果、箱崎遺跡の輪郭がたどれるようになってきた（註）。先の旧地形の復元もそのひとつで、遺跡の時代的な変遷もこの地形に左右されていることもわかってきた。この遺跡で最も古



3図 箱崎遺跡第57次調査区位置図（縮尺 1/500）

い遺物は刻目突帯文土器や磨製石斧とされるが、ともに北部の砂丘東側斜面に位置する調査地点で出土したものである。竪穴住居跡をはじめ明確な遺構が出現する古墳時代前期の地点も東側斜面、さらに筥崎宮創建以後の10、11世紀の遺構も宮東南の東側斜面である。砂丘西斜面に遺構が窺われるのは12世紀中頃で、これ以降14世紀初頭頃まで遺跡の広い範囲にわたって遺構が確認されるようになる。まさに遺跡の全盛期であり、とりもなおさず筥崎宮の勢力の発展を示すものであろう。13世紀後半には西側斜面の調査地区を中心に焼土や炭化物を含む層が確認されており、文永の役（1274年）の際の筥崎宮焼失との関係が推測されている。14世紀中頃以降16世紀にかけては筥崎宮南側に遺構が分布する傾向にある。これまでに検出された中世の遺構は建物、井戸、溝、墓など、遺物としては土師器、瓦器、中国陶磁器、朝鮮陶磁器、铸造関係遺物、銅鏡、石製品など多種多様にわたっている。詳細は44頁に掲載したこれまでの箱崎遺跡の各報告書によられたい。

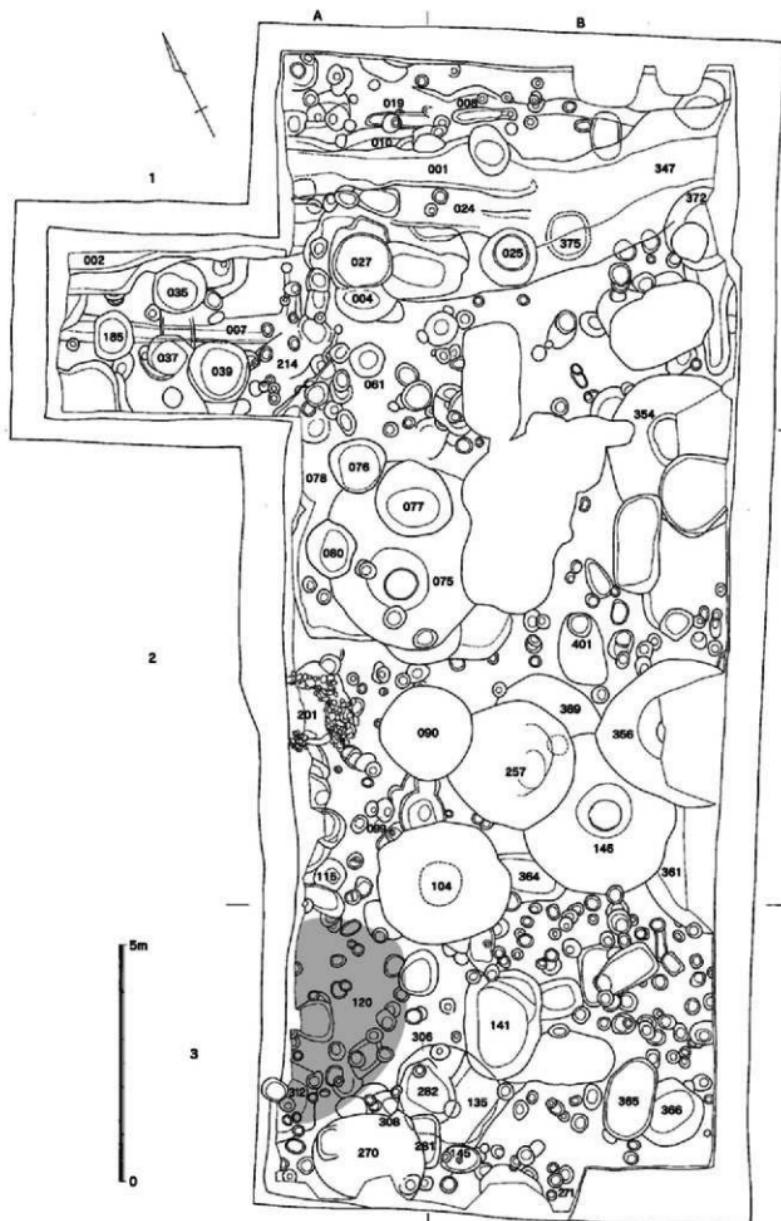
（注）桜本義嗣「福岡市所在の箱崎遺跡について」『中世都市研究会2003年九州大会資料集』2003



4図 西側調査区全景(南東から)



5図 東側調査区全景(南から)



6図 造構配置全体図 (縮尺 1/100)

III 調査の記録

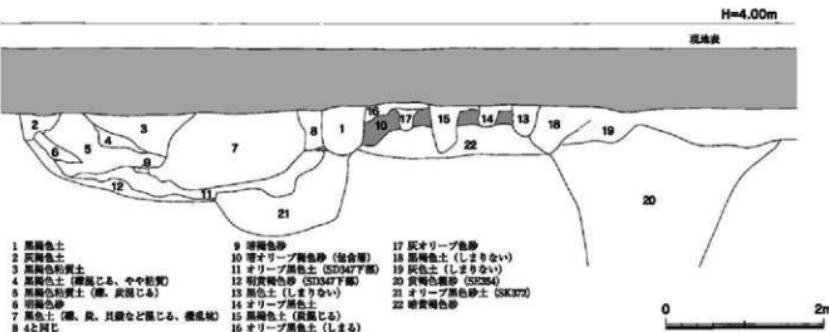
1 調査の概要

第57次調査地点は遺跡の中央や西北側、菅崎八幡宮の北約450mの所に位置する。かつての路面電車の軌道から東の大学通りに抜ける小路の商店街中にある。調査地で標高は3.8m。道路を挟んだ南側の街区では第19次、24次、56次の、東側では第21次の発掘調査が実施されている。

確認調査は対象地の北側部分で行われ、現地表面から0.8~1.2mまで近現代の表土や造成土、その下に厚さ10cmほどの遺物包含層、さらにその下が地山にあたる粗砂層となり、トレンチの南側で深さ0.9m、北側で1.3mと緩やかに傾斜することが明らかにされた。遺構には井戸・溝・土坑などがあり、包含層から切り込まれているとみられるが明確を欠き、地山面での検出が確実であるとの判断であった。調査にあたっては対象範囲の土留め工事とその中の表土・造成土のすき取り、搬出までを委託者が先行して実施し、そのうえで廃土処理の関係から土留め内を東西二分割にして行うこととなり、3月12日、西側（西側調査区）から発掘を開始した。4月11日には廃土を西側に反転して東側（東側調査区）の調査に入り、4月27日に調査区の埋め戻し、蓋地を行い、発掘を終了した。

7図は西側調査区北端の東壁土層を示したものである。アミで示した現地表から0.7mが先行すき取りした部分、それ以下は東側調査区への廃土反転時に土留めからやや内側部分を地山面まで掘削した。アミ掛けした10層が遺物包含層にあたり、北側に向かい傾斜する。それを切った遺構は主に近現代の遺構や擾乱であり、20層や21層は中世の遺構となる。10層の下の22層は地山への漸移層あるいは蓋地層とみられる。発掘に際しては、西側調査区ではこの包含層上面から、また東側調査区は包含層下まで除去した地山面から遺構検出を行った。

なお調査区内には10mのグリッドを組み実測を行ったが、報告にあたってはこれをもとに7図に示したように西からA・B・C・Dから1・2・3と区分けし、以下、遺構の検出位置についてはA-1区などと表示した。多少の出入りはあるが、おおまかには西側調査区がA区、東側調査区がB区にあたる。遺構番号は001からの通しで、遺構の種類によりその略号を番号の前についた。調査の過程で同一遺構に複数の番号が付けられた場合は最も若い番号を探った。



7図 B-1区東壁土層図 (縮尺 1/60)



8図 A-1区（東から）



9図 A-2区（東から）



10図 A-3区上面（東から）



11図 A-3区完掘後（東から）



12図 B-1・2区（南から）



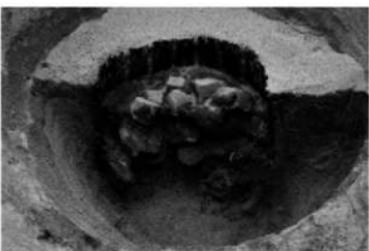
13図 B-2・3区（南から）

2 遺構と遺物

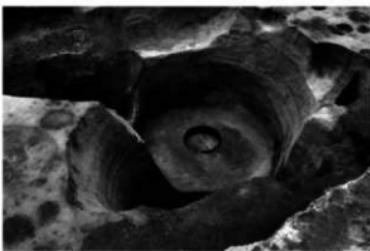
今次の調査で検出した遺構は井戸12基、土坑70基以上、溝13条、その他焼土面、多数の柱穴などがあり、調査区内は遺構を避けて歩けないほどの過密さであった（6図）。おおまかには北側に溝、中央に井戸、両側にピットが集中する傾向があり、また土坑は調査区全体に分布する（8～13図）。井戸を除けば遺構そのものの性格は不明瞭なものが多く、ピットも明らかに柱穴とわかるもののが多かったにもかかわらず建物などとしてまとめることはできなかった。遺構の時代は中世、近世から近現代におよぶ。ここでは近世以前の遺構・遺物を中心に報告を進める。なお、本文中に用いた輸入磁器の分類について『太宰府条坊XV』（太宰府市の文化財第49集、2000年）に基づいている。



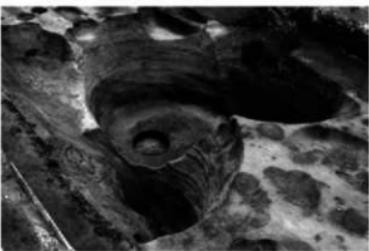
14図 SE075(東から)



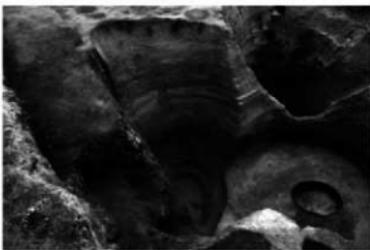
15図 SE075井戸側(北から)



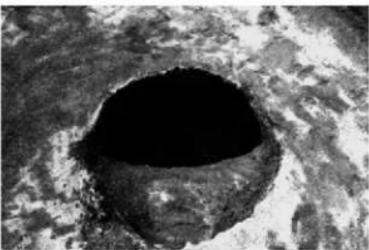
16図 B-2区井戸群(西から、中央SE146)



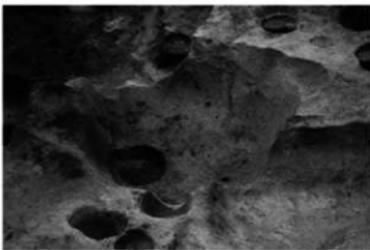
17図 B-2区井戸群(北東から、手前SE356)



18図 SE146・257(南西から、左SE257)



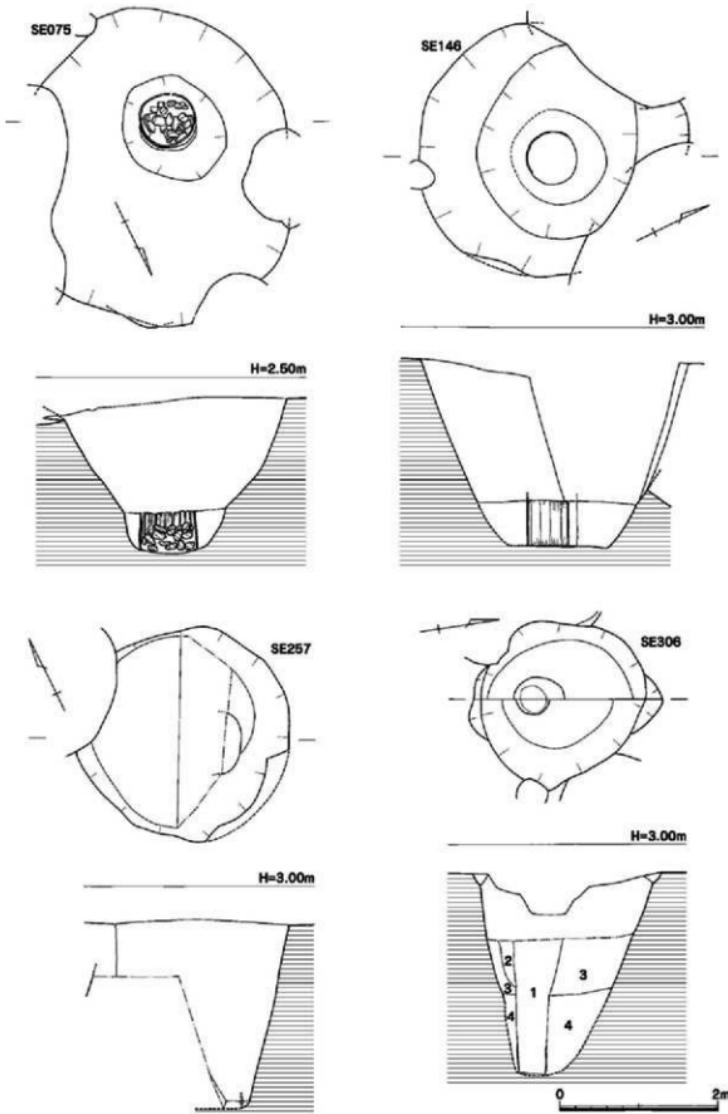
19図 SE146井戸側(北から)



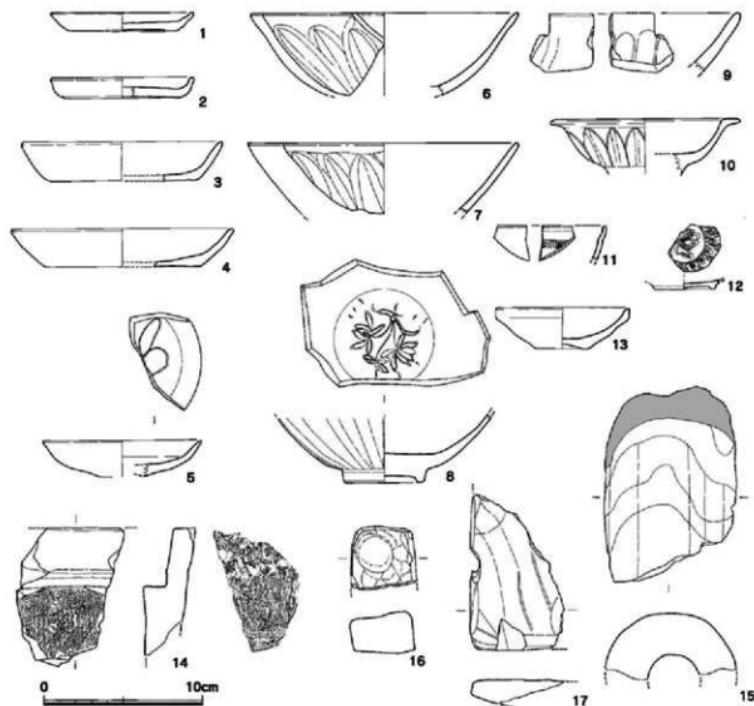
20図 SE306(東から)



21図 SE354(東から)



22図 SE075・146・257・306 実測図 (縮尺 1/60)



23図 SE075 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

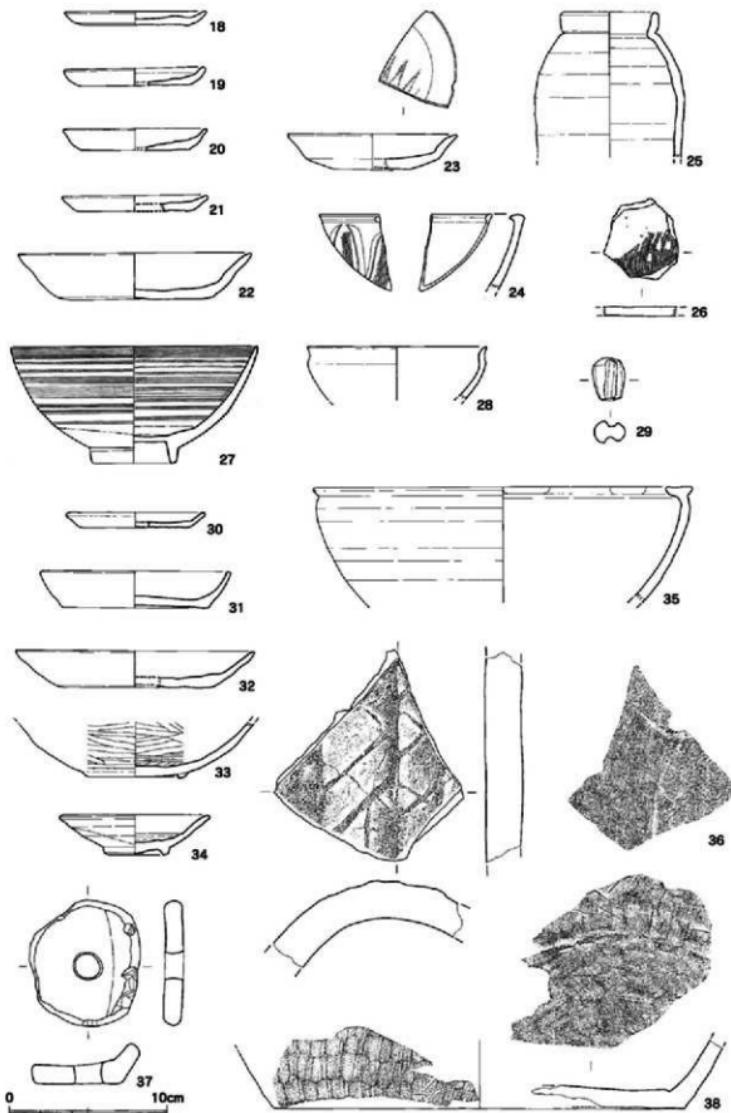
(1) 井戸

SE025、SE075、SE090、SE104、SE146、SE257、SE270、SE306、SE354、SE356、SE361、SE389の12基を検出した。近現代のSE025、SE090、SE104、SE270を除いた8基について以下みていく。

SE075 (14・15・22図)

A-2区に位置する桶を井戸側とした井戸である。検出面での掘り方は南北4.0m、東西3.5mの円形状を呈し、その南側寄りに井戸側を設ける。掘り方底面までの深さは1.95m、その標高0.3m。井戸側の桶は底面に置かれた一段のみが残存する。幅7~8cmの板を組み合わせたもので、径70cm、高さ47cm。内部には拳大の礫が充満する。SK076、SK077、SK080などに切られる。

出土遺物 (23図1~17) 1~4は底部糸切りの土師器杯皿。1・2は皿。口径9.0cm、器高1.1~1.3cm。1の底部には板状压痕がある。3・4は杯。口径12.6cm~14.0cm、器高2.4~2.5cm。5~12は磁器。5は白磁皿で見込みにヘラ書きの草花文を施す。6~10は龍泉窯系青磁。うち6~8は外面に鷲蓮弁文を描く模



24図 SE146・257・306出土遺物実測図（縮尺 1/3）

で、8の見込みには草花文の印刻を施す。9は口縁部が直線的な杯で、内面には縦の凹みを連続的に施し花弁形とする。10も杯で口縁端部を横に引き出し、外面には錦蓮弁文を施す。11は青白磁の杯か。口縁端部を屈曲させ、内面には雷文を帶状に施す。釉はうすい水色（55図）。12は青白磁の低く細い高台をもつ皿。見込みの中央に花芯、その外に圓線をめぐらせ、さらにその外に蓮弁を陽刻する。釉は淡い灰緑色で、残存部全体にかかる（55図）。13は褐釉陶器の皿。底部は上げ底でへそが残り、釉は全面にかかる。二次焼成を受けている。14は丸瓦、15は輪の羽口で、先端部は溶解物が付着する。16は砂岩製の磁石で図の両側面に砥面が残る。17は方形を呈する構部分が残存した滑石製品で、側縁には切り込みがある。井戸掘り方からは7・9とともに白磁碗Ⅷ類（見込み搔き取り）、同安窯系青磁碗Ⅰ類などが、また井戸側内からは8・10・11・13などが出土したが、図示したものも含めいずれも小～細片である。

SE146 (16~19・22図)

B-2区に位置する桶を井戸側とした井戸である。検出面での掘り方は径3.2m前後の円形を呈し、その中央に井戸側を設ける。掘り方底面までの深さは2.35m、その標高0.25m。井戸側の桶は最下底の一段を確認した。桶は幅10~15cm、高さ55cmの板を組み合わせたもので、径は65cmとなる。B-2区南側には7基の井戸が集中し、この井戸もSE257、SE356に切られ、SE361、SE389を切っている。

出土遺物（24図18~26） 18~22は底部糸切りの土師器杯皿。18~21は皿で、口径8.9~9.2cm、器高0.85~1.35cm。18・20の底部には板状圧痕がある。22は口径14.8cm、器高2.9cmの杯。底部には板状圧痕がある。23は同安窯系青磁の皿。見込みには櫛描きの文様を施す。24は龍泉窯系青磁の香炉か。口縁端部を平坦にして内面に折り返し、外面には蓮弁文のなかに櫛目文を施す。釉は淡い青緑色で、内面は露胎のままである。25は陶器の広口壺。青色釉が全面にかかっていたものと思われるが、二次的な被熱を受け、白色になっている。胎は淡い赤褐色。26は綠釉陶器の盤。内底に葉脈状の文様を彫り、光沢のある濃い緑の釉がかかる。外底は露胎。胎は砂を含み粗い（55図）。18・22・26は井戸側内から、他は掘り方からの出土である。

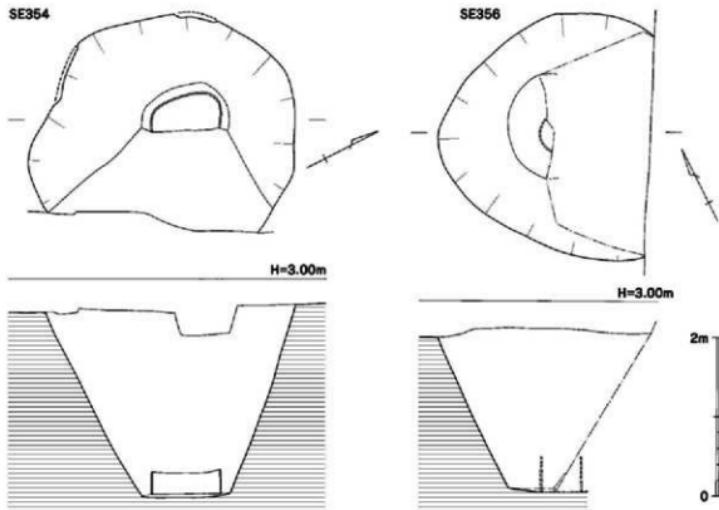
SE257 (18・22図)

B-2区に位置する桶を井戸側とした井戸であるが、西側調査区との境にあたり全掘はできなかった。検出面での掘り方は径2.2m前後の円形で、井戸側はその東寄りに設ける。掘り方底面までの深さは2.35m、底面の標高0.2m。井戸側の桶は最下底の木質痕跡でうかがうことができる程度で、その径は80cmほどに復元できる。SE090に切られ、SE146、SE389を切る。

出土遺物（24図27~29） 27は白磁の椀。うすい褐色の胎土の上に刷毛で白化粧土を粉引手風に施し、その上から透明釉を内面から外面体部下位までかけ、見込みを輪状に搔き取ったもので、内外面とも白色と灰緑色が継続状に表れている。高台は深い。口径17.6cm、器高7.4cm（55図）。28は龍泉窯系青磁の小壺。口縁部が屈曲し外反する。29は土鉢。断面梢円形の両側面に棒状工具を押し当て溝をつくる。図の下端がわずかに欠け、残存長2.6cm、幅2.0cm、厚さ1.3cm。いずれも井戸側内からの出土で、掘り方からは白磁皿Ⅸ類（口禿、高台付き）、龍泉窯系青磁碗Ⅲ類などが、底部糸切りの土師器杯皿とともに出土している。

SE306 (20・22図)

A・B-3区に位置する井戸である。井戸上部はSK282やSD135などに切られており、検出面から深さ0.8mで井戸側を確認し、それ以下は東側を半蔵して底面まで掘り下げた。検出面での掘り方は径2.0~2.1mの円形状、井戸側はその南寄りに設ける。掘り方底面までの深さ2.55m、底面の標高0.1m。底面から高さ30cmほどに皮状の木質がかろうじて観察できる。その径31~33cm。おそらく桶とみられる。



25図 SE354・356実測図（縮尺 1/60）

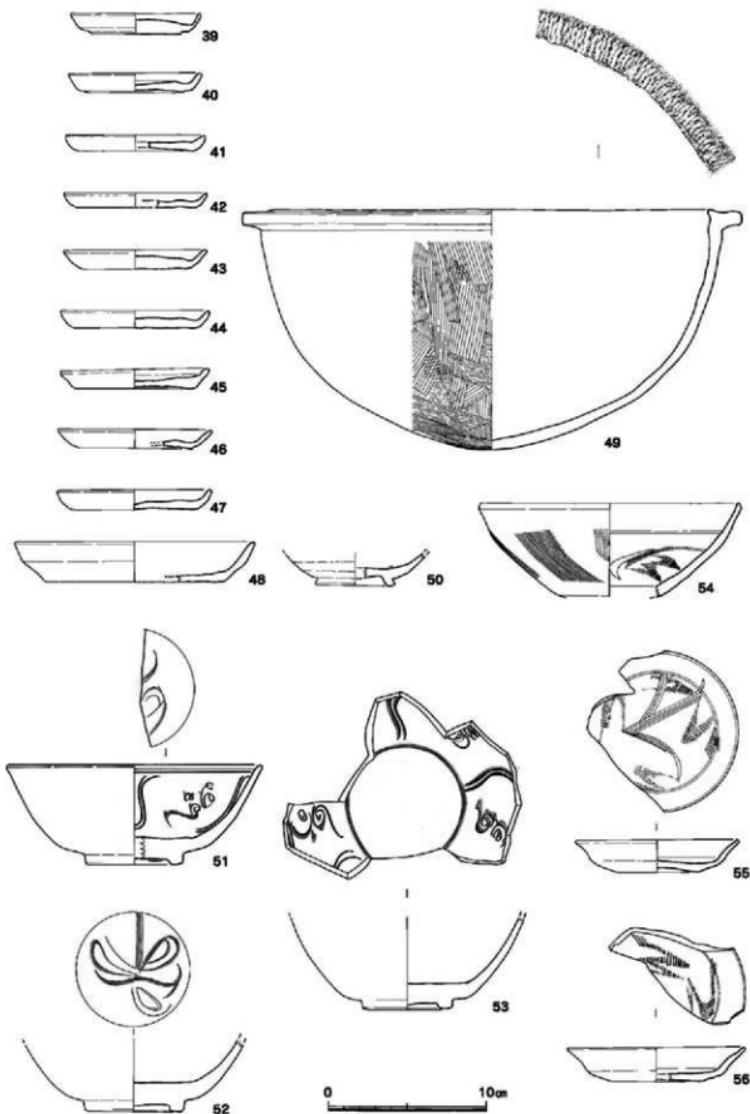
実測図の深さ80cm以下は土層断面を示しており、1が粗砂に黒色土ブロックを含んだ井戸側内部の埋土、2～4は掘り方（裏込め）土で、2が赤みをおびた粗砂、3が粗砂と灰色砂の互層、4が酸化鉄を含む粗砂となる。

出土遺物（24図30～38） 30～32は底部系切りの土師器皿。30は口径8.8cm、器高1.0cm、底部には板状圧痕がある。31は口径12.0cm、器高2.3cm、32は口径15.0cm、器高2.3cmをはかる。33は瓦器椀。低い高台を付け、体部は内外面ともヘラ研磨で仕上げる。34は高台が付いた白磁皿。軸を内面から外面体部までかけ、見込みを輪状に搔き取る。軸は灰白色。口径9.5cm、器高2.5cm。35は陶器の鉢。残存部には茶緑色の釉がかかり、体部外面は器面調整の凹凸により釉の濃淡が輪状に表れている。胎は褐色をおびた灰色で、白・黒色粒を含む。平坦な口縁部の上には目跡が残る。36は灰色を呈する丸瓦。37・38は滑石製石鍋底部片で、37はそれを円形に加工し中央に孔を開けた再加工品である。

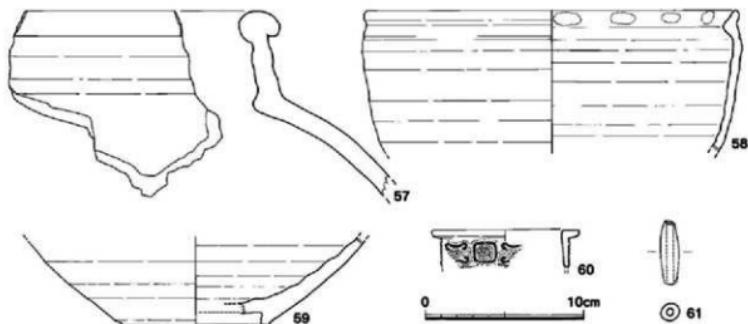
SE354 (21・25図)

B-1・2区に位置する桶を井戸側とする井戸である。東側が発掘区外にかかり、底まで掘り下げたのは西半部のみである。検出面での掘り方は南北幅3.3mの円形状を呈し、井戸側はその中央やや西寄りに設ける。掘り方底面までの深さは2.4m、底面の標高0.25m。井戸側の桶は径85cm前後の平面ややいびつな円形を呈し、底面から高さ27cmほど残存する。底部分を面取り尖らせた幅9～10cmの板材を組み合わせたものである。SK353、SK355に切られる。

出土遺物（26・27図39～61） 39～48は底部系切りの土師器皿。39～47は皿。口径8.2～9.7cm、器高0.9～1.3cm。40・42・44・45・47の底部には板状圧痕がある。また45・47には模のあとがあり、灯明皿として用いられたものとみられる。48は杯。口径15.2cm、器高2.55cm。底部には板状圧痕がある。49は土師質土器の鍋。丸底で、逆L字状に引きだした口縁部上面にはヘラで細かく刻みを入れ、



26図 SE354出土遺物実測図1 (縮尺 1/3)



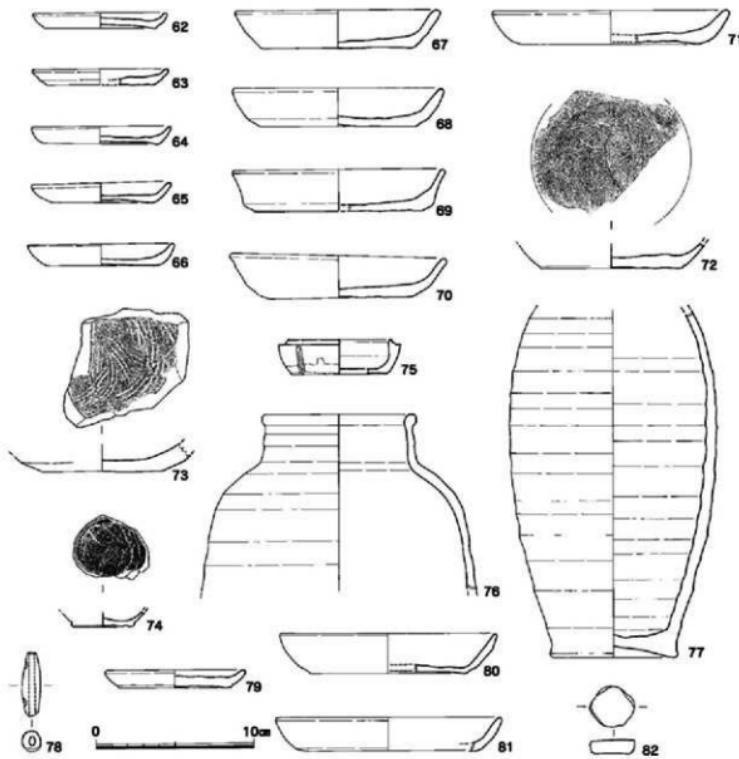
27図 SE354出土遺物実測図2(縮尺1/3)

あたかも縄の圧痕のようにみえる。外面は刷毛目調整、内面はナデで仕上げる。口縁部上面から外面にかけては模が付着し、内面下位には焦げつきのあとが著しい。50は白磁の高台付き皿。見込みが輪状に残る。釉は灰色。51～53は龍泉窯系青磁碗1類。いずれも体部外面は無文であるが、51・52は体部内面と見込みに、53は体部内面に片影りの花文、雲文などを施す。体部内面の文様は2本一単位の縦曲線で5分割される。51の口径16.2cm、器高6.25cm。釉は51・53が青緑色、52が褐色をおびた灰緑色。54～56は同安窯系青磁。54は柄で外面に細かい縦の櫛描文、内面上位に沈線をめぐらせその下位にヘラ描き文と櫛の点描文を施す。釉は灰緑色。55・56は皿。見込みに55はヘラ描文と櫛の点描文、56は櫛の点描文を施す。釉はともに青緑色。57～59は陶器。57は大甕。内面口縁下から外面にかけて褐色～暗褐色の釉を施すが、外面の釉は剥落している。胎は赤褐色を呈し、白色粒を多く含む。58は鉢。釉は残存部全体にかかり、灰緑色を主とするが、淡褐色に発色する部分がある。胎は淡褐色で細かいものから5mm大までの砂粒を含む。口縁部内側には目跡が残る。59は壺の底部。凹底で、内外面とも施釉する。二次的な被熱を受けて外面は白みをおびるが、底部は暗褐色を呈する。胎は赤褐色を主とし、白・黒色粒子を含む。60は素焼きの容器片。口縁部下に方1.5cmほどの二種の文様を交互に陽刻する。精良な胎土を用い、焼成良好、淡赤褐色を呈する。61は土錐。ナデで仕上げる。長さ4.0cm、径1.2cm。

SE356 (17・25図)

B-2区の井戸が集中した一角の東端に位置する井戸である。東側が調査区外にかかり、西半部のみを底まで掘り下げた。検出面での掘り方は南北幅3.05mの円形状を呈し、井戸側はその西側に設ける。掘り方の底面までの深さは2.05m、底面の標高0.6m。井戸側はその底面の木質痕跡をわずかにとどめ、径約30cmほどに復元できる。桶であろうか。SE146、SE361、SE389を切る。

出土遺物 (28図62～78) 62～72は底部糸切りの土師器杯皿。62～66は皿。口径8.4～9.2cm、器高1.0～1.4cm。63・65の底部には板状压痕があり、また63・65には模の痕跡がみられ灯明皿として用いられたものであろう。67～72は杯。72を除き口径13.0～15.0cm、器高2.1～2.9cm。72も含めすべての底部に板状压痕がある。72の内底にはヘラによる線刻がある。73は土師器甕の底部。内底には粗い刷毛目調整を放射状に行う。外面には模が付着する。74は青白磁の皿であろうか。型作りとみられ、釉は内面だけにかかる。二次的な被熱を受けており、暗灰色の釉の間に白色の線が網目状に入る。75も



28図 SE356・361出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

青白磁の合子の身。外面に縱方向の切り込みが入る。軸は灰緑色で体部外面の上半にかかる。76・77は掲軸壺器の壺。76はやや緑味をおびた褐色の軸が残存部全面に、77は暗褐～黒褐色の軸が上げ底部分を除きかかる。また77の底部外縁に幅広の目跡が三箇所残る。78は土錐。ナデで仕上げる。長さ4.1cm、径1.2cm。

SE361 (6図)

B-2区に位置するが、大半が調査区外にかかり、検出面から0.6m前後しか掘り下げが行えなかった。検出面での掘り方は径3.5m以上の円形状になるとみられる。SE146、SE356に切られる。

出土遺物 (28図79～82) 79～81は底部糸切りの土師器杯皿。79は口径8.8cm、器高1.15cm、80は口径13.6cm、器高2.5cm、81は口径14.2cm、器高2.1cmをはかる。82は土師器壺胴部片を打ち欠いて作った土製円盤。径2.8cm前後、厚さ0.9cm。他に白磁碗V類、同安窯系青磁、朝鮮系無釉陶器片などが出土している。

SE389 (6図)

B-2区に位置する。SE146、SE257、SE356に切られ、検出面での掘り方は北側部分を残すだけであった。復元すれば径2.4m前後の円形をなすものとみられ、その中央やや西南寄りに井戸側を設ける。掘り方底面までの深さは2.0m前後で、標高は0.6m前後である。井戸側は径40cmの底面の木質痕跡がからうじてうかがえる程度にすぎない。土師器皿、瓦器碗、龍泉窯系青磁碗、滑石製石鍋などの細片が出土したにとどまる。

(2) 土坑

調査区のはば全域で70基以上を検出した。ここでは図化できる遺物を出土した中世の土坑を中心にとりあげた。

SK004 (37図)

A-1区に位置する長軸をほぼ東西にとる楕円形の土坑である。北側をSK027に、また東側をSK026に切られ規模は明らかでないが、残存部から長さ1.3m、幅0.9mほどとみられる。深さ40cm。

出土遺物 (38図83～86) 83～85は底部糸切りの土師器杯皿。83の口径9.0cm、器高1.1cm、84の口径9.4cm、器高1.25cm、85の口径14.0cm、器高2.8cm。皿の2点は底部に板状圧痕がある。また83・85には内面から口縁部にかけて煤が付着し、灯明皿として用いたものであろう。86は同安窯系青磁碗。内面から高台付近まで施釉し、見込みを輪状に焼き取ったもので、釉は光沢のない灰緑色、胎は黒色微粒を含み灰色を呈する。他に白磁碗V類、龍泉窯系青磁碗など陶磁器類片が若干出土している。

SK027 (29・37図)

A-1区に位置する長軸をほぼ東西にとる長さ1.36m、幅1.12mの扁円形土坑である。蓋面は垂直に近く、底面までの深さは72cm。深さ10～50cmの坑内の北半部を中心に土師器杯皿がほぼ原形を保った状態でまとめて出土した。

出土遺物 (38図87～116) 図示したのはすべて土師器である。87～99は底部糸切りの皿。口径8.4～9.6cm、器高0.9～1.3cmをはかり、口径9cm、器高1.1cm前後のものが最も多い。91を除くすべての底部に板状圧痕がある。90・95は内面から口縁部端に煤の付着がみられ、灯明皿として使用したものであろう。100～113は底部糸切りの杯。口径14.4～15.7cm、器高2.6～3.4cmをはかり、口径15.0cm前後、器高2.8～3.0cmのものが主体である。105を除いたすべての底に板状圧痕が見られる。114～116は高台付杯。116の高台は径13.2cm、高さ2.5cmをはかり、杯の口径は24cm前後になるものとみられる。他の2点は116にくらべ小振りである。杯の底部は糸切り離しで、115には板状圧痕が残る。ほかに白磁碗IV・V類、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗、天目碗、陶器なども出土しているが、いずれも小片であり、量的にも土師器杯皿とくらべ少ない。

SK035 (30・37図)

A-1区に位置する長軸をほぼ東西にとる円形状の土坑である。東西幅1.10m、北側はSD002に切られる。深さは47cm。遺構上面から深さ10cmあたりに角礫が集中し、また深さ40cm付近で土師器杯皿がまとめて出土した。

出土遺物 (39図117～131) 117～126は底部糸切りの土師器杯皿。117・118は皿で、117の口径8.7cm、器高1.2cm、118の口径9.5cm、器高0.75cm。ともに底部には板状圧痕がある。119～126は杯。口径12.4～13.6cm、器高1.9～2.9cm。120の底部にのみ板状圧痕がある。127は須恵質土器の壺。胸部外面には格子状のタタキ、内面はカキ目調整を行う。内外面とも表面は黒色を呈するが、焼きがあまく内部は赤褐色となる。128は龍泉窯系青磁碗。体部内面に片彫りの花文を施す。釉は灰緑色。129は陶器の皿。



29図 SK027 (北から)



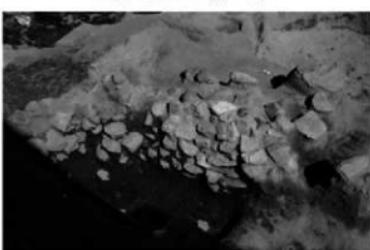
30図 SK035 (北から)



31図 SK076 (南から)



32図 SK141 (東から)



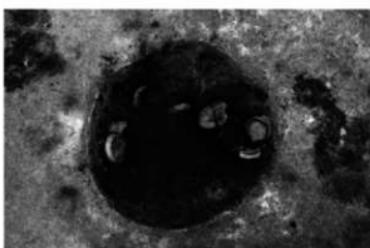
33図 SK201 (西から)



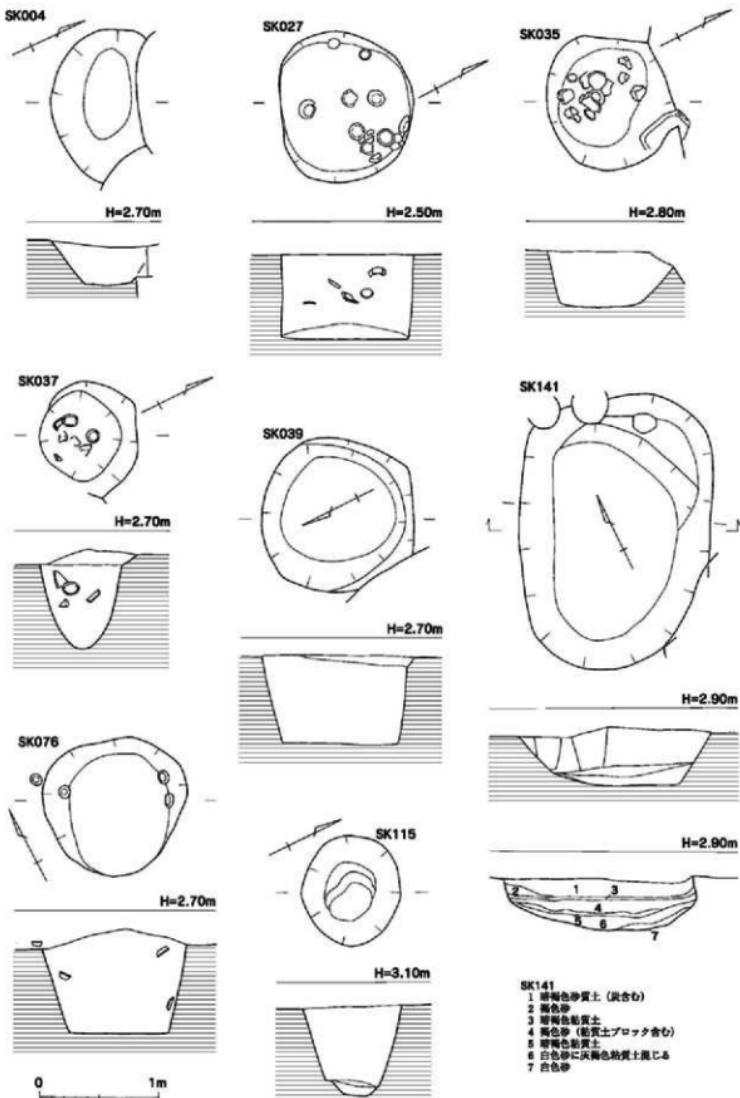
34図 SK365・366 (南から)



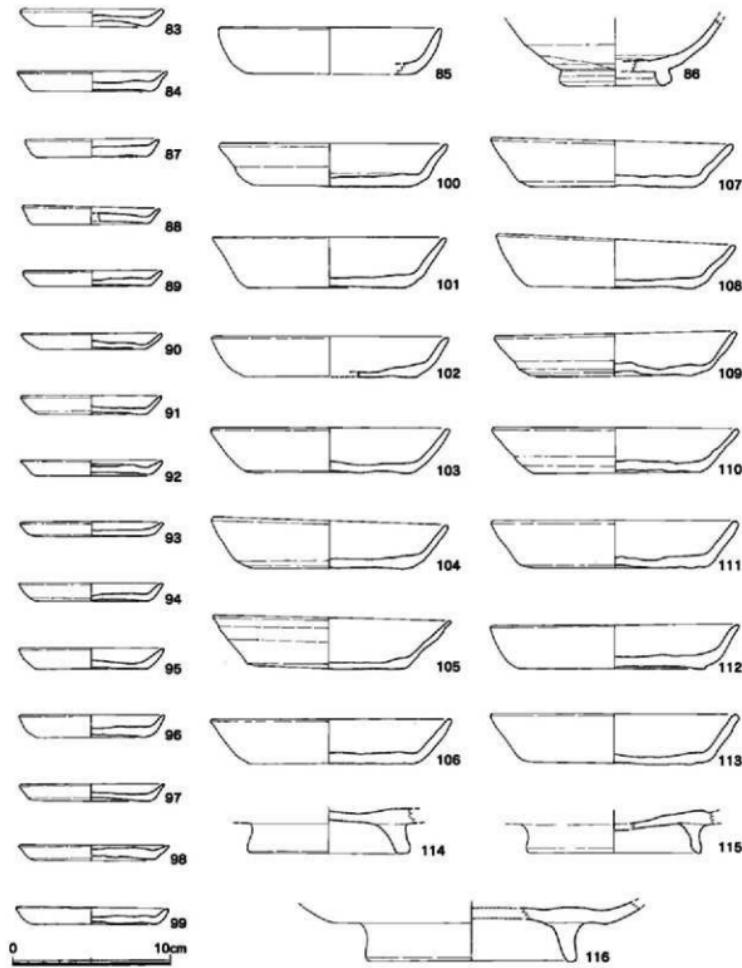
35図 SK366 (西から)



36図 SK401 (北から)

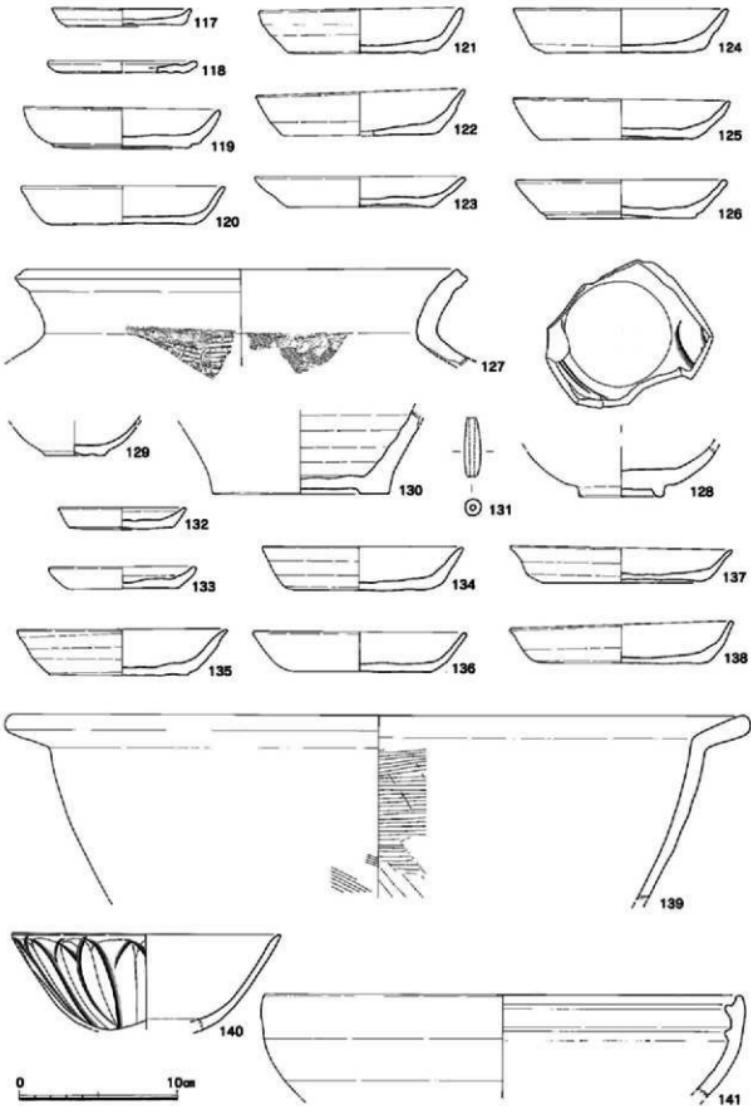


37図 SK004・027・035・037・039・076・115・141実測図 (縮尺 1/40)



38図 SK004・027出土遺物実測図（縮尺 1/3）

SE075から出土した13と同様のものである。上げ底の底部を除き暗褐色の釉がかかること。130は陶器壺。底部を除き黄味をおびた不透明の釉がかかること。胎は黒色粒を多く含み、体部は灰白色、底部は赤褐色となる。四耳壺の頬とみられる。131は土錘。ナデで仕上げる。長さ3.7cm、径1.0cm。この他白磁碗V



39図 SK035・037出土遺物実測図（縮尺 1/3）

類、龍泉窯系青磁碗II類（外面鏽蓮弁文）、同安窯系青磁碗などの陶磁器小片、鉄釘7点などが出土している。

SK037（37図）

A-1区、SK035の南側に位置する径0.85mの円形状土坑で、深さは85cmをはかる。北側の深さ15cmあたりで段がつき、それ以下深さ50cmまでに原形を保った土師器杯皿がまとまって出土した。SD007、SK039を切る。

出土遺物（39図132～141） 132～138は底部糸切りの土師器杯皿。132・133は皿で、132の口径8.0cm、器高1.4cm、133の口径9.2cm、器高1.4cm。133の底部には板状圧痕がある。134～138は杯。口径12.6～14.0cm、器高2.4～3.0cm。134と136の底部には板状圧痕がある。136の口縁部内面には煤が付着しており、灯明皿として用いられたものであろう。139は土師質土器の鍋。胴部内面は刷毛目、他は胴部外面上位に一部刷毛目が残るが横ナデで仕上げている。復元口径は43cmをはかり、外面には煤が付着する。140は龍泉窯系青磁碗。外面に鏽蓮弁文を施す。釉は褐色をおびた緑色。141は陶器の捏鉢。胎土には砂粒が多く含み、器表は砂粒の抜けた跡が著しい。無釉で小豆色を呈する。ほかに白磁皿IX類（口禿）、陶器壺などが出土している。

SK039（37図）

A-1区、SK039の東側に位置する径1.3mの円形土坑で、深さ75cm。南側の深さ10cmに段がつくが、それ以下の壁面はほぼ垂直になり底面に至る。SK037に切られ、SD007を切る。土師器杯皿がまとまって出土した。

出土遺物（40図142～158） 142～153は底部糸切りの土師器杯皿。142～150は皿で、口径9.0～11.0cm、器高1.1～1.5cmをはかる。142・145以外の底部には板状圧痕がある。151～153は杯。151の口径16.0cm、器高2.5cm、152の口径17.0cm、器高3.3cm。152と153の底部には板状圧痕があり、それが端正な153の底部を拓本で示した。154は白磁碗IV類。釉は灰色。155は低い高台が付いた白磁皿。見込みには沈線を入れる。釉は青みをおびた灰色で、内面から体部下位までかける。口縁部には白く釉溜りができ、一部は垂下する。156は龍泉窯系青磁皿。見込みにはヘラ描きの花文を施す。青緑色の釉が残存部全体にかかる。157・158は土鍤。157は一部欠損するが、長さ3.75cm、径1.1cmをはかる。158は二次的な被熱を受けている。ともにナデ仕上げである。陶磁器類も出土しているが圧倒的に土師器杯皿片の出土量が多い。

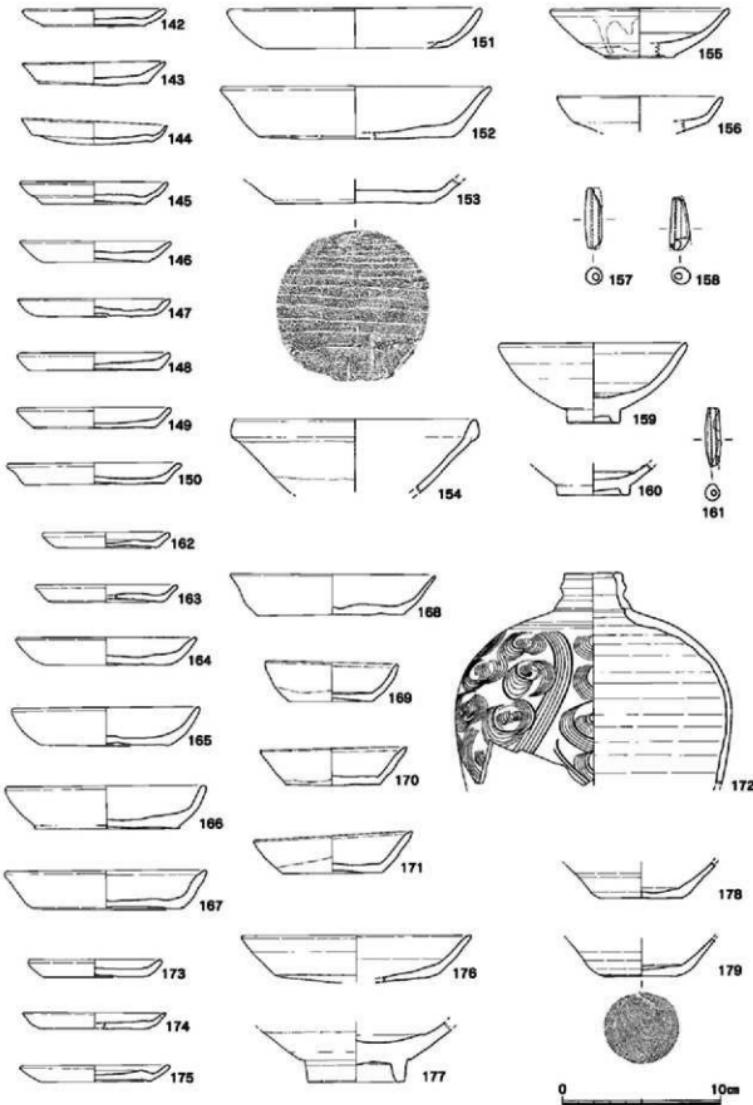
SK061（6図）

A-1区の南側の西寄りに位置する径0.75m、深さ25cmの円形土坑である。壁面は緩やかに傾斜し、径0.35mの平坦な底面に至る。遺物の出土は少ない。

出土遺物（40図159～161） 159は龍泉窯系青磁小碗。内外面とも無文で、灰緑色の釉が一部高台上にまでかかる。見込みは調査が粗く胎土が突出する。160は白磁の小碗であろうか。見込みは無釉で、目跡状のものが残る。体部との境には段がつきそれより上位、および体部外面上位まで灰味緑色の釉がかかる。161は土鍤。団の下端部を欠き、残存長3.7cm、径1.1cm。作りは雑で、器表には指ナデによるとみられる凹凸が残る。ほかに底部糸切りの土師器杯皿片などが少量出土している。

SK076（31・37図）

A-2区北側に位置する径1.15～1.2mの円形土坑で、深さは78cm。壁面は南側でオーバーハング気味になる。底面は長さ1.1m、幅0.85mの南北に長い楕円形を呈する。完形の白磁皿が深さ40cmのあたりまでに3点出土し、うち1点は西側上面にあることから土坑が西側に広がっていたものとみられる。ほかに土師器皿も完形で底面から20cm上で出土している。SE075を切る。



40図 SK039・076・115・141出土遺物実測図（縮尺 1/3）

出土遺物（40図162～172） 162～168は底部糸切りの土師器皿。162・163は皿で、162の口径8.0cm、器高0.95cm、163の口径9.0cm、器高1.05cm。163の底部には板状圧痕がある。164～168は杯。口径11.4～12.9cm、器高2.4～2.7cm。168の底部には板状圧痕がある。169～171は白磁皿。いずれも口縁端部内側の釉を搔き取った口禿の皿である。169は口径8.4cm、器高2.6cm、釉は青みをおびた灰白色で、口禿の部分に赤色の付着物がみられる。170は口径9.3cm、器高2.5cm、釉は暗い灰白色。口禿部分に模が付着し、あるいは灯明皿として使用されたものか。171は口径9.9cm、器高2.6cm、釉は灰緑色（55図）。172は青白磁の壺。梅瓶と称されるもので大きく張った胴部の上に高さ2.5cm、口径4.0cmの口縁部がつく。胴部上位に3条の沈線をまわし、その下に櫛描きの文様を施す。施文工具は6本線で、まず縱方向の曲線を入れて全体を区画し、その間をおそらく同じ工具を用いた径3～4cmの渦巻き状の文様でうめる。釉は緑味をおびた水色、胎は灰白色で黑色粒を含む。残高13.3cm（55図）。ほかに龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗、陶器大壺などの小片が出土している。

SK115（37図）

A-2区南側、調査区境近くに位置する径0.83～0.91mの円形状土坑である。壁面は深さ60cm付近の西側でいったん段を作り、長さ0.35m、幅0.20mの梢円形状の小さな底面に至る。検出面から底面までの深さ76cm。SK285・326を切る。

出土遺物（40図173～177） 173～176は底部糸切りの土師器皿。173～175は皿で、口径8.4～9.2cm、器高1.0～1.1cm。いずれも底部に板状圧痕がある。176は杯で、口径14.4cm、器高2.95cm、底部には板状圧痕がある。177は白磁碗V類。見込みには段が付く。釉は灰味をおびた緑色で、残存部外面にはほとんどかからない。ほかに龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗などの小片が出土している。

SK141（32・37図）

B-3区の西寄りに位置する長さ2.3m、幅1.6mの南北に長軸をとる梢円形の土坑である。壁面の傾斜は緩やかで、北側の深さ30cmに小さなテラスを設け、そこから10cmほど下がって底面となる。検出面から底面までの深さ48cm。覆土は砂と粘質土が交互に堆積する。SE306、SD135を切る。

出土遺物（40図178・179） ともに土師器の皿とみられるが、底部が小さく、身が深い。器壁は薄く均一で、胎土も精良である。また底部の糸切りも整然と残る。ほかに近世陶磁器などが出土した。

SK145（6図）

B-3区の南側の西寄りに位置する長さ0.8m、幅0.6mの東西に長軸をとる梢円形土坑である。深さは18cmと浅く、底面はほぼ平坦である。遺物の出土量は少ない。SD135を切る。

出土遺物（42図180・181） 180は土師器皿。口径8.6cm、器高1.0cm、底部には板状圧痕がある。181は平瓦。上面は布目をナデで消す。下面是刷毛目で仕上げる。ほかに白磁碗・皿の細片などが出土している。

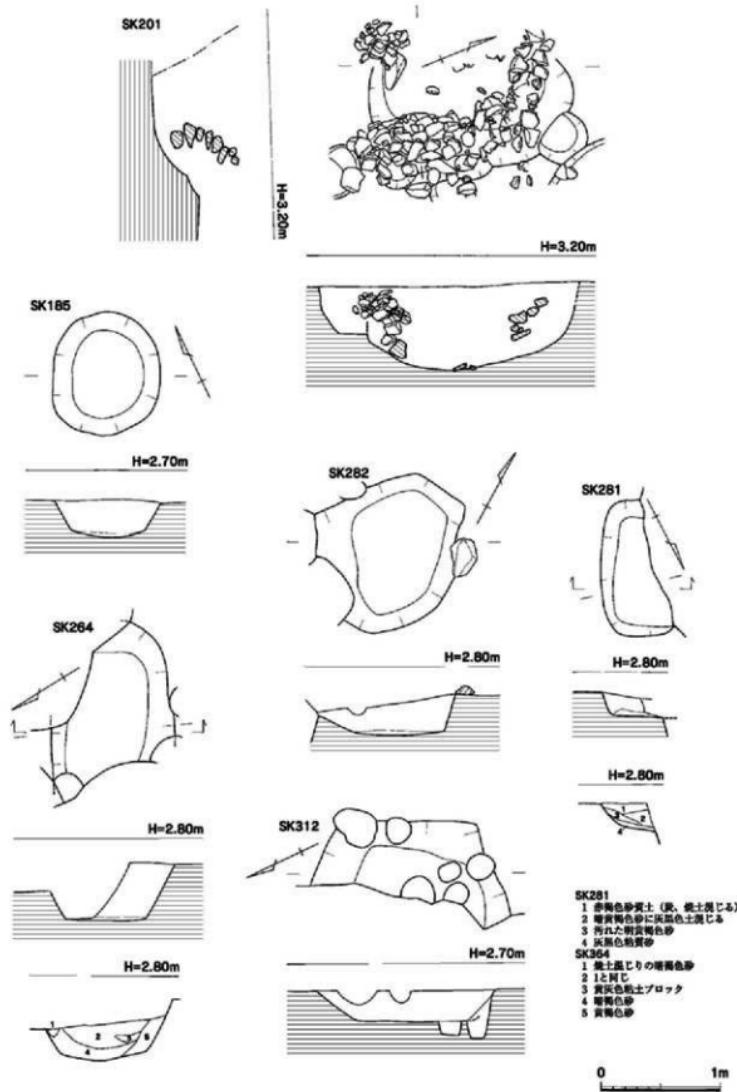
SK185（41図）

A-1区の西側に位置する長さ1.03m、幅0.9mの南北に長軸をとる梢円形土坑である。深さは31cmで、底面は鍋底状となる。SD007を切る。

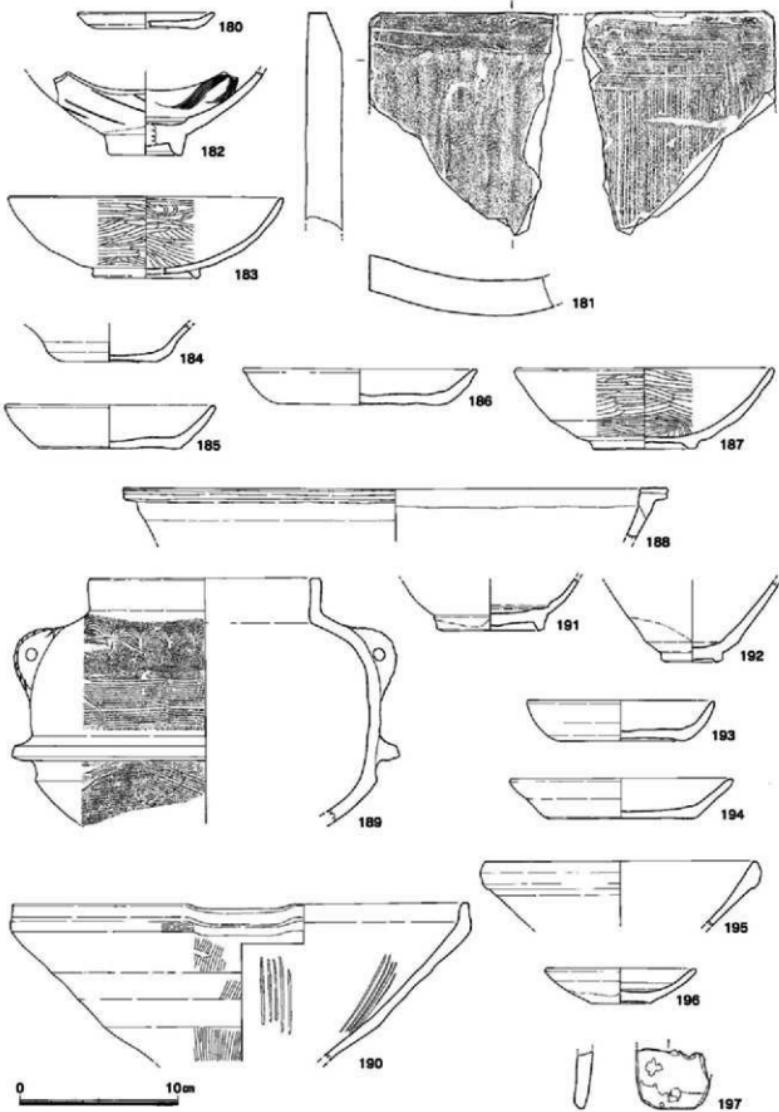
出土遺物（42図182・183） 183は瓦器碗。口径17.2cm、器高5.1cm。低い高台を以外は内外面ともヘラ研磨で仕上げる。口縁部外面および内面の底部以外は黒色、残りは灰白色を呈する。182は同安窯系青磁碗。外面には細い横線をまばらに入れ、内面は櫛描き文を施す。釉は灰緑色で高台近くまでかかる。ほかに底部糸切りの土師器皿、白磁碗IV・V類の破片が出土している。

SK201（33・41図）

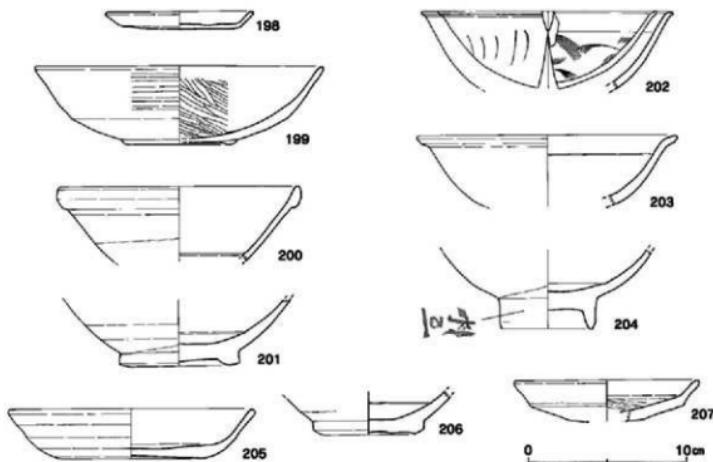
A-2区中央西側に位置する石組み土坑である。西側は発掘区外にかかる。南北に長軸をもつとみら



41図 SK185・201・281・282・312・364実測図 (縮尺 1/40)



42図 SK145・185・201・282出土遺物実測図（縮尺 1/3）



43図 SK308 · 312出土遺物実測図（縮尺 1/3）

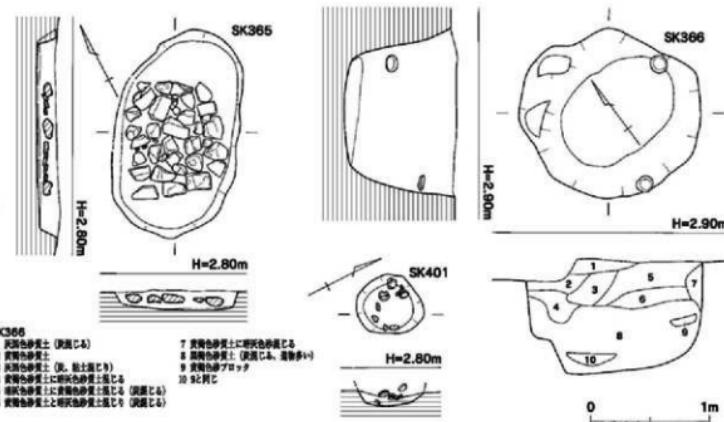
れる長さ1.70m、深さ70cmの土坑を掘り、その壁面に拳大の穂を単純に積み上げたもので、控え積みなどはみられない。この土坑は包含層より上部から掘り込んでいる。

出土遺物（42図184～192） 184～186は底部糸切りの土師器杯皿。184はSK141で出土した皿と同様のものである。185・186は杯。185の口径13.2cm、器高2.75cm、186の口径14.6cm、器高2.25cmをはかり、底部には板状圧痕が残る。187は瓦器椀。断面逆台形の低い高台と外底以外はヘラ研磨を行い、口縁部内外面は灰黒色、ほかは灰白色を呈する。188は土師質土器の鍋とみられる口縁部片。胎土には砂粒が多く含み粗いが、焼成は良く、おもに赤褐色を呈する。残存部の調整はナデ。189は土師質土器の釜。扁球形の胴部の上位に双耳をつけ、下位には鋒をめぐらす。口縁部は直立し、復元口径14.6cmをはかる。胴部の双耳間には小さな重弧文を連続して施し、双耳下鋒までは深い横刷毛目が櫛目文のように施される。また双耳上面には刷毛目工具を用い格子文を施す。底部内面は横～斜めの刷毛目調整、口縁部は横ナデ、胴部内面は横の板ナデで仕上げる。耳を取り付けた際の二本の指頭が内面に残る。胎土には砂粒を少量含み、焼成良好、淡褐色を呈する。外面には煤が付着する。190は須恵質土器の擂鉢片。擂目は5本一組。外面は継の刷毛目、内面は摩滅して調整不明。胎土には砂粒を少量含み、焼成良好、暗灰色～灰黒色を呈する。191は白磁碗の底部片。釉は灰白色で、見込みを輪状に焼き取る。192は天目椀。釉とよばれる茶味の釉が体部下位までかかる。焼きがあまく、また二次的被熱を受けている。

SK281 (41図)

A-3区南側に位置する南北に長軸をとる隅丸長方形の土坑である。長さ1.15m、幅は西側をSE270に切られ不明。確認できる深さは22cm。覆土上層には施肥、炭化物が混じる。遺物量はきわめて少なく、土師器杯皿などの小片とともに小鉄滓が20個ほど出土している。SE306、SK282、SD135を切る。

SK282 (41図)



44図 SK365・366・401実測図(縮尺1/40)

A-3区に位置する長さ1.60m、幅1.20mの不整規円形土坑である。西側壁面がほかに比べ緩やかに傾斜する。深さ35cm。SK281に切られ、SE306、SD135を切る。

出土遺物(42図193~197) 193・194は底部糸切りの土師器皿。193は口径11.8cm、器高2.5cm、194は口径14.0cm、器高2.5cmで底部には板状圧痕がある。195は白磁碗IV類。釉は緑味をおびた灰色。196は白磁皿。わずかに上げ底で、釉は灰味をおびた緑色。197は滑石製石鍋片を再加工したヘラ状の製品片。残長3.8cm、幅4.6cm。ほかに土師器皿、瓦器碗、口禿の白磁皿などの細片が出土している。

SK308 (6図)

A-3区に位置するが南側をSE270、東側をSE306、また西側はピットに切られ、径1.1m程度の円形状の掘り方を確認できるにとどまる。壁面には段がつき、深さは40cm。

出土遺物(43図198~204) 198は土師器皿。口径9.25cm、器高1.1cm、底部は糸切りで板状圧痕がある。199は瓦器碗。高台は低平である。内面はヘラ研磨、外面上位は回転を利用した粗い研磨、下位はヘラ削り。外面上半と内面上位は黒色、ほかは灰白色を呈する。200~204は白磁碗。200・201はIV類で、釉はともに緑味をおびた灰色を呈する。202~204はV類。202の外面には細い縦線をまばらに入れ、内面は櫛描文を施す。釉は灰緑色。203は内面口縁部下に凹線をめぐらす。釉はわずかに緑味をおびた灰白色。204の釉は青味をおびた灰白色。高台外面に墨書きがみられる。ほかに同安窯系青磁碗などが出土している。

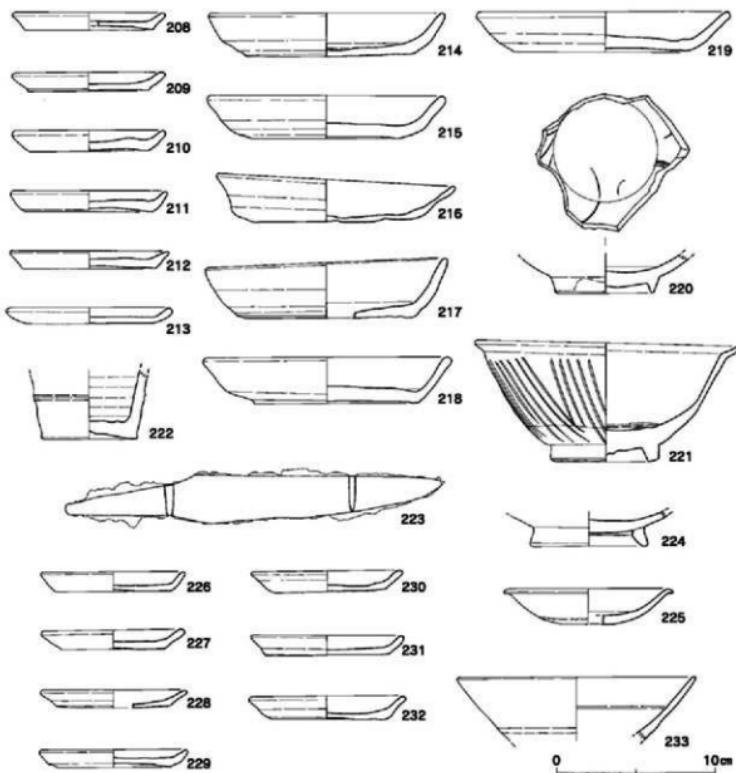
SK312 (41図)

A-3区に位置するが、大半が調査区外にかかる。方形状の掘り方をもち、検出面での南北幅1.65m、22cm。壁面は緩やかな傾斜で、平坦な底面に至る。深さ27cm。出土遺物の量は少ない。

出土遺物(43図205・206) 205は土師器皿。口径15.4cm、器高3.1cm。糸切り底で、板状圧痕がある。206は白磁碗IV類。釉は緑味をおびた灰色。ほかに瓦器碗、白磁碗V類などの小片が出土している。

SK364 (6図)

B-2区、SE104とSE146の間にかろうじて残った長軸を東西にとる長方形の土坑である。両井戸に南



45図 SK366 · 401出土遺物実測図（縮尺 1/3）

北を切られ長さは不明、幅は1.05m、底面までの深さは49cm。覆土には焼土が混じる。

出土遺物（43図207） 瓦器皿である。円みをおびた糸切り離しの底前から口縁部が稜をつけて外反する。内底はヘラ研磨、口縁部はヘラナデを行う。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好、外面は灰黒～黒色、内面は淡褐色を呈する。ほかに糸切り底の土師器皿、白磁碗V類などが出土している。

SK365 (34 · 44図)

B-3区東南隅に位置する南北に長軸をとる長さ1.77m、幅1.05mの梢円形土坑である。検出面から深さ5cmの坑内中央の南北長1m、東西はほぼ解りいっぱいの0.9mの範囲に、20cm大を中心とした比較的扁平な礫を敷きつめる。土坑底面までの深さは15cm。SK366を切る。出土遺物はない。

SK366 (34 · 35 · 44図)

B-3区東南隅に位置する径1.43～1.54mの不整円形の土坑である。西側壁面には小さなふたつテラス

が段状につき、底面は東側から西側に傾斜し、その平面形は東西方向長軸をとる長さ1.06m、幅0.74mの楕円形状となる。8層の上面あたりで完形の土師器皿が2点出土したほか、8層途中から土師器杯皿を中心まとめて遺物が出土した。SK365に切られる。

出土遺物（45図208～223） 208～219は底部糸切りの土師器杯皿である。208～213は皿で、口径9.6～10.4cm、器高1.1～1.3cm。いずれも底部に板状圧痕がある。214～219は杯。口径14.8～15.8cm、器高2.6～3.65cmをはかり、215以外の底部には板状圧痕がある。214、215の内面には模が付着する。220は白磁碗。体部内面にヘラ描きの文様を施し、その一部は見込みにまでかかる。釉は淡灰色で、高台の一部にまでかかる。221は同安窯系青磁碗である。外面には粗い鶴目文を施す。釉は灰緑色を呈し、内面から外面体部下半までかけた後、見込みの釉を輪状に搔き取る。この搔き取り部分と高台疊付に砂目跡が残る。胎は淡褐色だが、高台の下半だけが赤褐色になっている。口径16.5cm、器高7.6cm、雜なつくりの青磁碗である（56図）。222は海器の壺底部。内外面とも灰緑色の釉がかかる。底部外縁には砂目跡が残る。223は鉄小刀、鷲に覆われ、闇の部分を中心に細部は不鮮だが、長さ23.7cmをはかる。ほかに白磁碗IV・V類、鉄釘6本などが出土している。

SK375（6図）

B-1区中央に位置する南北長1.04m、東西幅0.9mの円形形状の土坑である。SD347の掘削後、その底で検出したもので、深さは10cmにとどまる。覆土は暗青灰～暗灰色砂土で、木炭片を含む。遺物の出土量は少ない。

出土遺物（45図224・225） 224は土師器碗底部。摩滅し内面は不明瞭であるが、全体をナデで仕上げているようである。胎土には黒色粒を多く含み、焼成は良好。225は白磁皿。釉はわずかに綠味をおびた灰色。外に引き出した口縁の一部が欠けているにもかかわらず、釉をかけ製品としている。ほかに同安窯系青磁などが出土している。

SK401（36・44図）

B-2区中央に位置する径0.50～0.57mの円形土坑である。上面を近世土坑が切っており、深さは13cmほどしか残存しない。覆土は黒褐色。完形もしくはそれにちかい土師器皿がまとめて出土した。

出土遺物（45図226～233） 226～232は底部糸切りの土師器皿。口径9.0～9.8cm、器高1.1～1.5cm。いずれも底部に板状圧痕がある。227～229の内面から外面にかけて模らしきものが認められる。233は白磁碗。灰白色の釉が内面から外面体部下半までかかる。ほかに底部糸切りの土師器皿などが出土しているが、ほとんどが土師器皿で占められる。

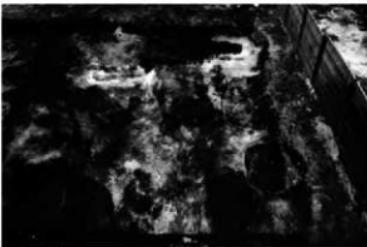
（3）溝

主な溝としてはSD135がB-3区に位置する以外はすべて調査区北側に集中しており（46～48図）、この部分の溝についてここでは一括して記述する。

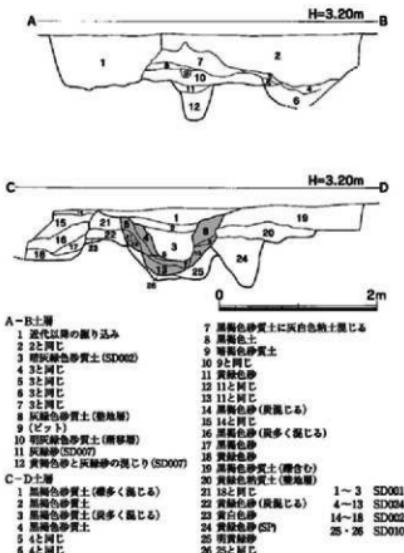
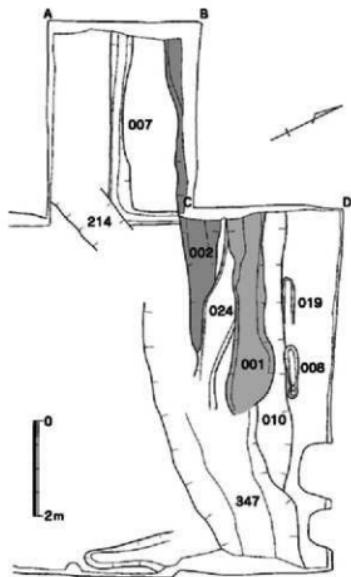
SD001、SD002、SD010、SD024は東西に走る溝で、48図のC-D土層図にその切り合状況を示した。これによれば、SD010→SD024→SD001の順で溝が築かれ、またSD002はこの東側でSD024に切られることから、SD010の次に掘られたものとみられる。このうちSD010以外は包含層を切って掘りこまれており、その出土遺物からみても近世以降の溝である。この3条の溝は土層図部分でSD001が幅1.2m、深さ65cm、SD024が幅1.3m、深さ75cm、SD002が幅1m前後、深さ65cmをはかる。溝筋は互いにぶれがある。SD001は東側約4mで途切れている。SD024のなかには小礫が多い。SD010は幅1.2m以上、深さは包含層下から50cmをはかる。南側の肩は判然としないが、北側の溝筋はほぼ直線的になる。出土遺物は少ないが混入とみられる近世海器片以外は、土師器杯皿（糸・ヘラ切り混じり）、白磁、



46図 A-1区溝（東から）



47図 B-1区溝（東から）

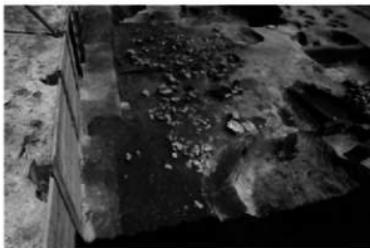


48図 A・B-1区溝位置略図および土層実測図（縮尺 1/100, 1/60）

龍泉窯系青磁、同安窯系青磁などの細～小片があり中世の溝と考える。この溝の北側に沿って幅20cm、深さ15cm前後のSD008とSD019の小溝が走る。ともに中世の遺物のみが出土している。SD007は調査区西端から東側に3.6m、そこから直角に折れて北側に走る幅50cm、深さ45cmの溝で、その断面は48図のA-B土層図に示した。糸切り底の土師器杯皿、瓦器碗、陶器片などの小片が少量出土している。SD214はSD007の東南隅部分を切って北東～西南方向に続く幅1.2m、深さ10cmほどの浅い溝状構築である。土師器杯皿（糸・ヘラ切り混じり）、瓦器碗、白磁、同安窯系青磁碗などが出土しているがいす



49図 SX120(東から)



50図 SX120(南から)



51図 SX120実測図(縮尺 1/40)

れも小片で量も少ない。

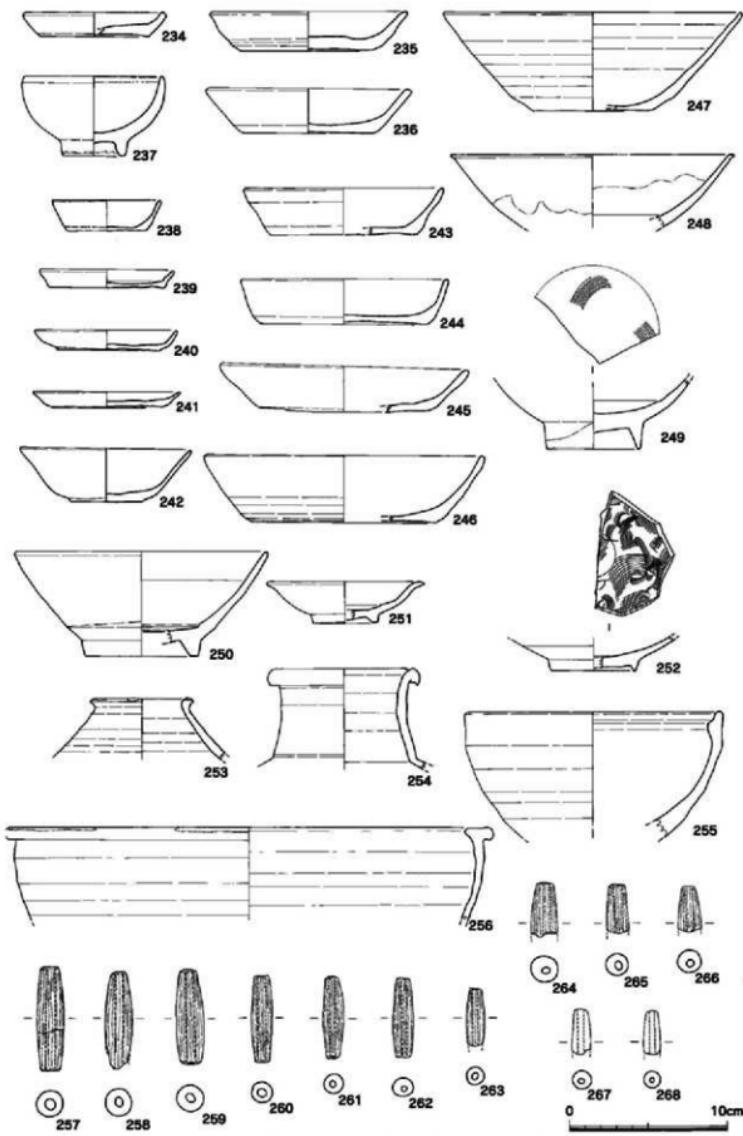
以上は西側調査区で検出した溝であるが、東側調査区では包含層下まで掘り下げたため細かい切り合ひ関係の確認が困難となり、先の東西溝をSD347としてまとめて検出するにとどまった。調査時の所見では溝上部が灰黒～黒色土で多量の木炭、石炭ガラとともに近現代の遺物が出土し、溝底から中位までは暗灰褐色～暗褐色細砂土であった。その土層は7図にみられる。

B-3区のSD135は幅1.3m、深さ10cm前後の浅い溝で、SD214と同様の溝筋をとる。溝内上部には20cm大までの礫が多い。糸切り底の土師器杯皿、瓦器碗、白磁碗V類、龍泉窯系青磁碗II類(連弁文)などの礫～小片が出土している。SK141、SK281、SK282に切られ、SE306を切る。

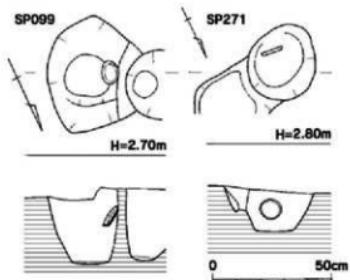
(4) その他の遺構と遺物

SX078 (6図)

A-1区北側でSK076の西側に接して検出した段落ち状の遺構である。南側に弧状の掘り方がわざかに残る。検出面上からの深さは10cm前後をはかり、底面はSK076の検出面と同じ高さである。SK076ではこの面から白磁皿の完形品が出土しており、あるいはその上部をなす遺構の可能性もある。



52図 SX078・120 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)



53図 SP099・271遺物出土状況実測図(縮尺1/20)

A-3区で検出した。礫が北東-西南方向に長さ4m、幅2mの範囲に集中し、そこに炭化物、焼土が広がる面である。みようによって礫は南北二群に分かれ、北側は方1.5mの区画をとる。礫の大きさは10cm位のものが多く、ほとんど重なり合いをもたず地表面に置かれている。礫の面は地山面から30cmほど高い位置にある。炭化物、焼土は礫の集中部から東側外に1mほど、さらに南側にも広がる。土師器杯皿を中心に陶磁器類などの遺物が多量に出土した。

出土遺物 (52図238~268) 238~246は底部糸切りの土師器杯皿であるが、形態、法量の差異が大きい。238~241は皿。238は口径6.8cm、器高2.0cmをはかり、口縁端部には煤が付着していることから灯明皿として使用されたものであろう。239~241は口径8.4~9.2cm、器高1.0~1.35cm。いずれも底部には板状圧痕がある。242は口径10.8cm、器高3.4cm。底部は糸切りの痕が継然と残る。体部は薄手に作り、焼き上がりも良い。243~246は杯。口径は12.5~17.6cm、器高2.8~4.25cm。244・245は底部に板状圧痕がある。247は土師器の鉢。底部は糸切りで、体部は内外面とも回転ナデで仕上げる。248・249は白磁碗V類。248の釉は灰白色で、体部内面上位には釉溜まりがみられる。249は見込みに櫛目文を施す。釉は緑味をおびた灰色。250は白磁碗V類。見込みの釉を輪状に搔き取る。釉色は灰色。251は見込みを輪状に搔きとった白磁皿V類。254は白磁の四耳壺とみられる口縁部片。灰色の釉が残存部全面にかかる。252は青白磁碗。低く細い高台をもつ。内底に櫛目とヘラ描きの文様を施す。青みをおびた釉が高台内面を除きかかる(56図)。253は陶器壺。釉は暗灰緑色で、外面から口縁部内面までかかる。口縁部上端には目跡が残る。255は陶器の捏鉢。砂粒を多く含んだ胎土で無釉、暗褐色~黒色を呈する。内面は使い込まれるつるしている。256は陶器鉢。口縁部から内面に施すするが、口縁部の釉は拭き取る。釉は緑味をおびた灰色、外面露胎部分は赤褐色を呈する。胎土には砂粒が多く、器表にも露出する。257~268は土錠。257~266は精良な胎土を用い、総の研磨で仕上げる。破損品を除けば長さ5.0~6.6cm、径1.3~1.7cmをはかる。267・268は胎土に細砂を含み、ナデで仕上げる。口径1.05~1.2cmと先の土錠に比べ小振りである(56図)。このほか銅錢の「天賀通寶」(922年初鋤)、鉄釘などが出土している。

SP099 (53図)

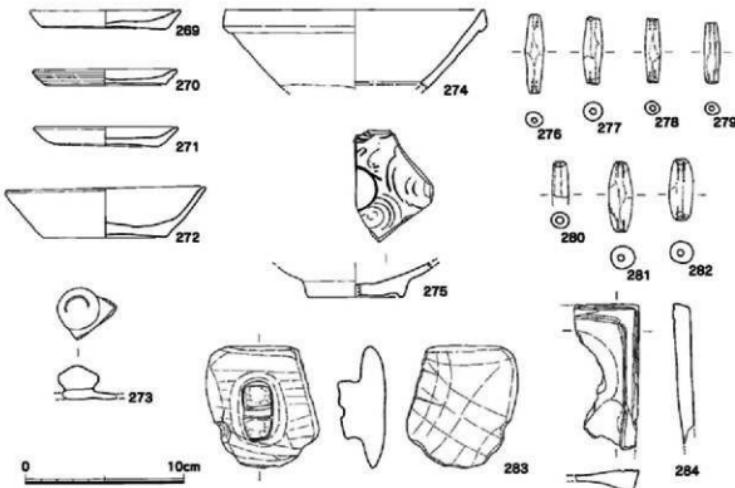
A-2区、SE090とSE104の間に位置する径45cm、深さ33cmのピットである。ピット底から15cm上の壁面に立て掛けるようにして土師器皿が出土した。建物建築の際の地鎮祭の埋納遺物であろう。

出土遺物 (54図269) 土師器皿。口径9.4cm、器高1.2cm、底部は糸切りで板状圧痕が残る。

SP271 (53図)

出土遺物 (52図234~237) 234~236は底部糸切りの土師器杯皿。234は皿で、口径8.7cm、器高1.5cm。底部には板状圧痕がある。ほかの2点は杯で、235が口径12.4cm、器高2.5cm、236が口径13.0cm、器高2.8cmをはかる。235の底部には板状圧痕がある。杯の小片にはヘラ切り底も1点ある。237は龍泉窯系青磁小碗。やや青みをおびた灰色の釉を高台型付き周辺以外にかけ、口縁端部内側の釉は搔き取り、口禿とする。露胎となった二箇所は淡赤褐色を呈する。復元口径8.7cm、器高5.0cm。ほかに須恵質土器の捏鉢、龍泉窯系青磁碗(鏡蓮弁文)などが小片が出土している。

SX120 (49~51図)



54図 ピットおよびその他の出土遺物（縮尺 1/3）

B-3区南端に位置する径30cm、深さ18cmのピットである。ピット底から10cm上の壁面に沿うように垂直の状態で土師器皿が出土した。SP099と同様の性格をもつ。

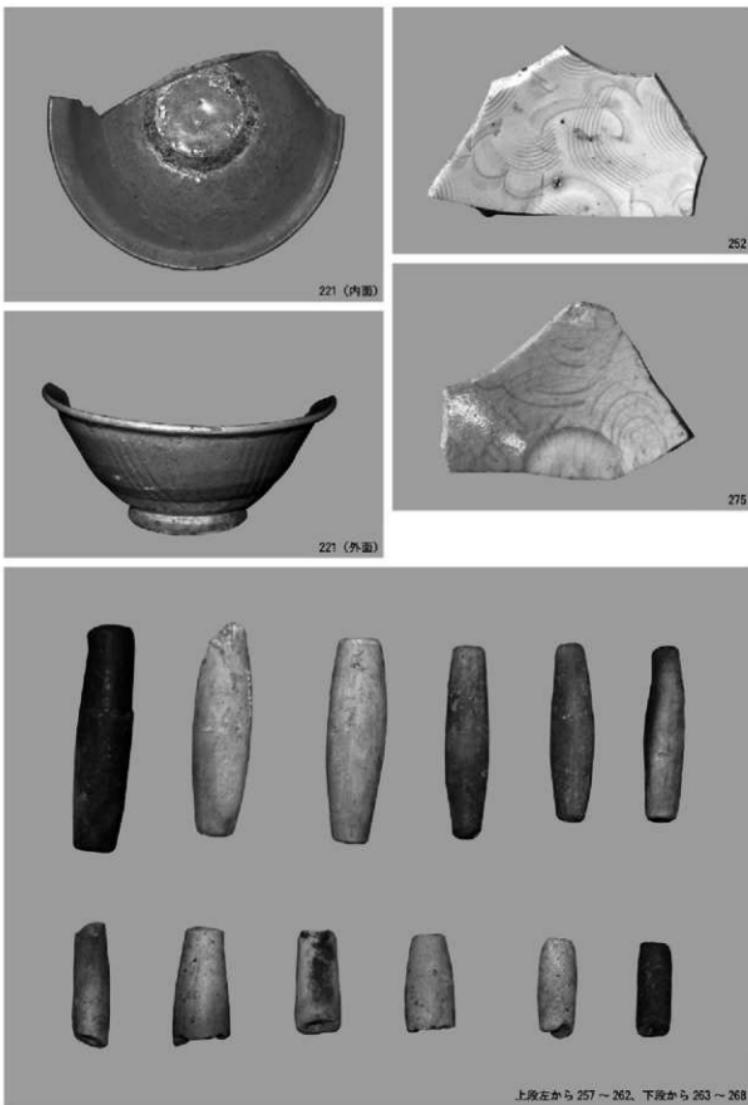
出土遺物（24図270）土師器皿。口径9.0cm、器高1.0cm、底部は糸切りで板状圧痕が残る。

その他の遺物（54図271～284）

271は土師器皿。口径9.0cm、器高1.0cm、底部は糸切りで板状圧痕が残る。272は土師器皿。口径12.6cm、器高3.2cm、底部は糸切り。内面および体部外面に煤が残り灯明皿として使用されたものである。273は宝珠状のつまみをもつ縫軸陶器の蓋である。釉は明黄緑色で、宝珠を除いた蓋上面にかかる。胎土には細砂を少し含む。274は白磁碗IV類。釉は青みをおびた灰白色であるが、二次的な比熱を受けて全体に黒ずみひびが入る。275は青白磁碗。体部内面には細いヘラ描きの文様を施す。釉は水色で高台外側までかかる。豊付きの内側は輪状に削りとる（56図）。276～282は土鍾。276～280は精良な胎土を用い、継の研磨で仕上げる。280を除けば長さ3.7～4.9cm、径0.9～1.2cmをはかる。このうち一括出土である277～279は二次的な比熱を受け赤褐色を呈する。281・282は胎土に砂粒を含み、ナデ仕上げたもの。281の長さ4.3cm、径1.5cm、282の長さ3.9cm、径1.5cm。283は滑石製石鍋の耳部分を転用したあて具状の製品。表裏とも削りで形を整えたあと研磨を行う。耳の部分には煤が残る。284は粘板岩製の覗片。外縁と海の縁に溝を刻む。271はSP386、272はSP129、274はSP103、276はSP231、277～279はSP231、280はSP118、残りは検出面や擾乱からの出土である。ほかに劍銘の「成平通寶」（999年初鋤）、「皇宋通寶」（1039年初鋤）、「元豐通寶」3枚（1078年初鋤、1枚はSP221出土）が検出面、擾乱から出土している。



55図 出土遺物写真 1



56図 出土遺物写真2

IV 小 結

箱崎遺跡のある東区箱崎市区は宮崎宮の門前町、唐津街道の宿場町、近代においては大学町などとして発展してきた。遺跡の発掘調査では弥生時代のはじめから人びとの営みがあったことが知られ、古墳時代以降は集落や墓地など明確な遺構が検出されるにいたっている。古代から中世にかけてはこの遺跡の最盛期で、「その昔箱崎千軒といわれ、对外交易基地として唐人街などもあり、殷賑をきわめた」とされる状況が徐々にではあるが明らかになりつつある。

本報告の箱崎遺跡第57次調査は遺跡の中央や西北部あたり、地形的には古砂丘尾根からやや西側に下った斜面に位置する。検出したのは中世から近現代に至る井戸、溝、土坑などの集落に伴う遺構である。遺構は新旧錯綜しており、出土遺物が遺構そのものの年代を示すとは限らない。しかし、出土遺物の大半を占める土師器杯皿にヘラによる底部の切り離しがほとんどなく、輸入磁器に白磁に加え龍泉窯系青磁、同安窯系青磁がみられるところから、今回の調査地点の遺構の初現は12世紀後半頃に求められるよう。遺構の切り合ひ関係と土師器杯皿の法量などからみて、SE306、SE354、SE389、SK366、SK401などの遺構がこの時期に相当しよう。以下輸入陶磁器の変遷などをあわせみると13世紀初めにはSE146、SK039が、13世紀前半にはSE356、SD135、13世紀中頃にはSE075、13世紀後半から一部14世紀はじめにかけてはSE257、SK027、SK037、SK076、SK282などが営まれたものと考えられる。石組土坑のSK201は16世紀以降、調査区北側の東西溝のSD001、SD002、SD024は18世紀以降の遺構とみられる。

今次の調査地点の東側、より古砂丘の尾根に近い第21次調査地点（『箱崎13』**）では、遺構の初現は12世紀中頃で、墳墓（土壙墓、木棺墓）5基と少数の土坑が検出されている。掘立柱建物や井戸などは12世紀の後半になって出現し、13世紀中頃にかけて継続し、後半以降は遺構が減少し、14世紀以降近世までは遺構が確認できなかった。南側にあたる第24次調査地点（『箱崎15』**）でも木棺墓や土坑が12世紀中頃に現れ、13世紀前後から生活遺構がみられる傾向にある。また同じ南側でも第24次調査地点より西側にあたる第19次調査地点（『箱崎10』**）では、12世紀後半から遺構が確認されはじめ、13世紀から14世紀初頭にかけての遺構が大半を占め、以降は近世町家が形成されるまで集落としての機能は失われたとされる。今次の調査地点はほぼ第24次調査と同様の傾向が認められる。ほかの2地点とともに遺構の初現をのぞけば、集落の形成、継続、廃絶の時期はほぼ同じである。

箱崎遺跡の消長についてはⅡ章で簡単に触れたが、遺跡西北地区の古砂丘西側斜面に位置する今次の調査地点周辺をみれば、12世紀中頃に墓地としての利用が尾根線に近い側ではじまり、後半にいたって掘立柱建物群と井戸などからなる集落がかなり広範囲に形成されたとみられる。13世紀、引き続いて集落は継続するが、その後半、第21次調査地点では遺構が減少する。今次の調査地点でも後半新たに掘削されたとみられる井戸は1基にとどまり、集落は停滞に向かっているのかもしれない。第24次調査では検出した焼土層や焼けた出土遺物から、13世紀中頃から後半にかけて周辺で大火があったとみられている。今回確認した焼土面（SX120）もその一端である可能性もある。14世紀になるとこの一帯の集落は廃絶の様相を呈することから、この大火がその大きな原因となったことも考えられる。これが文久11（1274）年の元軍による宮崎宮の焼き討ちによるものかは、箱崎遺跡の今後の調査と、13世紀から14世紀にかけてのさらなる考古学的検討を要するものと考えられる。

註 * 「箱崎」『角川日本地名大辞典40福岡県』1988

** 各報告書については44頁の一覧を参照のこと

箱崎遺跡発掘調査報告書（刊行順、2007年まで）

- 「箱崎遺跡」福岡県文化財調査報告書第79集 1987（第2次）
「高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ」市報*193集 1988（第1次）
「箱崎遺跡2—箱崎遺跡群第3次調査の報告」市報第262集 1991
「箱崎3—箱崎遺跡群第5次調査の報告」市報第273集 1992
「箱崎遺跡4—箱崎遺跡群第6次・7次調査報告」市報第459集 1996
「箱崎遺跡5・蒲田部木原遺跡5」市報第550集 1998（第9次）
「箱崎6—箱崎遺跡群第10次調査の報告」市報第551集 1998
「箱崎8—箱崎遺跡第11次・13次調査報告」市報第592集 1999
「箱崎9・比恵甕棺遺跡—箱崎遺跡群第14次・比恵甕棺遺跡第1次発掘調査報告」市報第625集 2000
「箱崎10—箱崎遺跡第18次・第19次調査報告」市報第664集 2001
「箱崎11—箱崎遺跡第16次」市報第703集 2002
「箱崎12—箱崎遺跡第17次」市報第704集 2002
「箱崎13—箱崎遺跡第21次調査報告」市報第705集 2002
「箱崎14—宮崎土地区画整理 **I—箱崎遺跡第20次調査報告」市報第767集 2003
「箱崎15—箱崎遺跡第24次調査報告」市報第768集 2003
「箱崎16—箱崎遺跡群第15次調査の報告」市報第810集 2004
「箱崎17—宮崎土地区画整理 II—箱崎遺跡第22次調査報告(1)」市報第811集 2004
「箱崎18—箱崎遺跡第27次調査報告」市報第812集 2004
「箱崎19—箱崎遺跡群第29次・31次調査報告」市報第813集 2004
「箱崎20—箱崎遺跡第38次調査」市報第814集 2004
「箱崎21—宮崎土地区画整理 III—箱崎遺跡第26次調査報告」市報第815集 2004
「箱崎22—宮崎土地区画整理 IV—箱崎遺跡第22次調査報告(2)」市報第852集 2005
「箱崎23—宮崎土地区画整理 V—箱崎遺跡第26次調査報告(2)」市報第853集 2005
「箱崎24—箱崎遺跡第39・41・44次調査」市報第854集 2005
「箱崎25—箱崎遺跡第25・32・42次調査」市報第896集 2006
「箱崎遺跡第48次調査(報告)」「福岡市埋蔵文化財年報 Vol.19 2004年度」2006
「箱崎26—宮崎土地区画整理 VI—箱崎遺跡第30次調査報告(1)」市報第914集 2006
「箱崎27—宮崎土地区画整理 VII—箱崎遺跡第30(2)・40(1)・46次調査報告」市報第948集 2007
「箱崎28—宮崎土地区画整理 VI—箱崎遺跡第40・49次調査報告」市報第949集 2007
「箱崎29—箱崎遺跡第12次調査報告」市報第950集 2007
「箱崎30—箱崎遺跡第37次・第45次調査報告」市報第951集 2007
「箱崎31—箱崎遺跡第51次調査報告」市報第952集 2007

* 「市報」は「福岡市埋蔵文化財調査報告書」の略

** 書名副題の「宮崎土地区画整理」は「宮崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告」の略

報告書抄録

| | | | | |
|--------|---|-----------|--------------|------------|
| ふりがな | はこざき さんじゅうご | | | |
| 書名 | 箱崎 35 | | | |
| 副書名 | 箱崎遺跡第57次調査報告 | | | |
| 卷次 | | | | |
| シリーズ名 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書 | | | |
| シリーズ番号 | 999 | | | |
| 編著者名 | 浜石哲也 | | | |
| 編成機関 | 福岡市教育委員会 | | | |
| 発行機関 | 福岡市教育委員会 | | | |
| 発行年月日 | 20080331 | | | |
| 作成ID | | | | |
| 郵便番号 | 810-8621 | 電話番号 | 092-711-4667 | |
| 住所 | 福岡県福岡市中央区天神1-8-1 | | | |
| 収録遺跡名 | はこざきいせき 箱崎遺跡 | | | |
| 所在地 | ふくおかふくおかしおがしへこざきいせきめにょんきゆうさんばんちほか 福岡県福岡市東区箱崎1丁目2493番地外 | | | |
| コード | 市町村 | 40131 | 遺跡番号 | 2639 |
| 日本測地系 | 北緯 | 33°37'07" | 東経 | 130°25'23" |
| 調査期間 | 20070312～20070427 | | | |
| 調査面積 | 245m ² | | | |
| 調査原因 | 共同住宅建築 | | | |
| 収録遺跡名 | 箱崎遺跡 | | | |
| 種別 | 集落(都市) | | | |
| 主な時代 | 中世 | | | |
| 主な遺構 | 井戸8、土坑多數、ピット多數、焼土面 | | | |
| 主な遺物 | 土師器・瓦器・須恵質土器・白磁・龍泉窯系青磁・同安窯系青磁・青白磁・中国製陶器・瓦・土製品・石製品・金属製品・銅鏡 | | | |
| 特記事項 | 青白磁梅瓶 | | | |

福岡市埋蔵文化財調査報告書第999集

箱崎 35

—箱崎遺跡第57次調査報告—

2008年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会
 福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 田堀印刷有限会社
 福岡市中央区草香江1丁目8番24号